通俗衛生叢書・・特版

御成婚記念

母と子

大阪府衛生會

特115
687イ

始

特115
687イ

帝國圖書館藏

母と子

大正
15. 2. 10
内交

明治天皇

明治天皇

易に曰く「患ひを思ひ豫れて之を防ぐ」と、實に衛生の大道を喝破した至言である。苟も病あるを知つて先づ之を豫防するの道を盡くし、而して長への健康を保ち、天壽を全うすることを得たならば、人生の幸福焉より大なるは莫しであらう。

されば、汎く衛生の智識を求めて之を消化吸收し以て實踐躬行の指針と爲したならば必ずや其の幸福を享受するに疑ひはないが、惜むらくは世上未だ之を指導すべき良書に乏しい憾がある。そこで當面必要なりと信ずる衛生上の諸問題を平易簡明に解説して一般の家庭に注入することが、此の目的を達成するに最も捷徑であると思ふところから、本叢書を逐次刊行せんとするに到つたのである。冀くは此の小冊子の説くところ們令ひ其の期待に副はなくとも、少くも衛生的生活の向上に資するところがあるならば、本叢書の使命も亦決して徒勞ではあるまい。

大阪府衛生會

はしがき

國家の隆盛は健康なる國民によつて保たれ、健康なる國民は健康なる婦人の胎内より生るゝ事を思へば婦人の衛生一日も忽せにする事が出來ないと思ひます。翻て我が國に於ける婦人の衛生思想を觀察致しまするに相當教養ある人ですら尚ほ隔靴痒痒の感を深からしむるものが決して尠なくありませぬ。茲に於て我が大阪府衛生會は畏くも　皇太子殿下御成婚の記念事業の一つとして婦人衛生思想の喚發に資せむ爲め豫て同會より出版しつゝある通俗衛生叢書の特別版として婦人の衛生に關する一册を出版せむと企て、役員の一人にして産科婦人科醫を以て專門とせる私に執筆を托されました。菲才淺學の私として到底其器に非ずとは存じましたが誠に光榮ある事なれば否みも得せず此擧に出ました。此書の性質たる何人が見ても能く理解し實行の出來る樣でなければ詮のなき事でありますから、殊更に言葉を飾らず極めて平易なる俗語のみを用ひ頗る露骨に言ひ現はしました。定めて語格や假名遣ひの誤りもあらうと存じますが、幸に之を咎めず其眞意を汲み、一般家庭に於ける婦人の衛生上の手引として頂く事が出來れば此上の喜びは御座いませぬ。

大正十三年六月一日

御成婚祝賀の當日

著者　土肥衛誠す

母と子

目次

緒言……一
第一章　婦人生殖器の畸形……二
第二章　子供に發する婦人病……三
一、陰門、膣、尿道炎……三
第三章　月經及び月經時の攝生法……五
第四章　結婚に對する注意……八
第五章　花柳病……九
一、淋疾……九
二、黴毒……一〇

三、軟性下疳……二
第六章　主として中年期に發する婦人病……一二
い、陰門炎、膣加答兒、バルトリン氏腺炎……一二
ろ、子宮實質炎……一三
は、子宮内膜炎、頸管加答兒……一四
に、卵巣炎、輸卵管炎（一名喇叭管炎）、子宮周圍炎……一五
ほ、子宮の後轉、後屈、左傾、右傾……一六
へ、子宮下垂、子宮脱、膣脱……一七
と、尿道炎、膀胱加答兒、腎盂炎……一七
第七章　主として中年期に起る婦人病の原因……一八
第八章　主として中年期に起る婦人病の徴候……一九
い、白帶下（こしけ）……一九
ろ、月經困難、月經不順、月經過多及び月經閉止……二〇
は、子宮出血……二一
に、下腹及腰部の疼痛、下肢の牽引痛、下腹及腰部緊滿の感並に倦怠……二二
ほ、下腹の硬結……二二
へ、發熱……二三
と、兩便の通利障害……二三
ち、不姙症（うまず）……二四
り、神經症狀……二五
第九章　一般婦人科病の豫防法と其攝生法……二六
第十章　主として老年期に發する婦人科病……二九
一、更年期の月經異狀……二九
二、子宮癌（しらちながち）……三〇
三、乳癌……三二
第十一章　年齢に關係なく起る婦人科病……三三

い、子宮の腫瘍……三四
ろ、卵巣の腫瘍……三六

第十二章　姙娠及び姙娠中の異狀……三八

一、姙娠の經過……三八
二、姙娠中の攝生法……三九
三、姙娠中の異狀……四一
い、姙娠嘔吐（惡阻、つはり）……四一
ろ、姙娠中浮腫（腎臟炎、脚氣、心臟病、貧血症）……四三
は、姙娠中の出血、流產、早產……四四
に、子宮外姙娠……四六
ほ、姙娠中の花柳病……四八
へ、姙娠中の異狀帶下……四九
と、姙娠と結核……五〇
ち、姙娠中に於ける胎兒の死亡……五一

第十三章　分娩及び分娩時に於ける主なる異狀……五二

第一　分娩時の注意……五二
一、準備……五二
二、分娩開始時……五三
三、產室及產床……五四
四、產婦及看護者の心得……五五
五、普通分娩に要する時間……五六
第二　分娩時に於ける主なる異狀……五七
一、分娩の遲延……五七
二、陣痛微弱……五八
三、子癇……五九
第三　分娩直後に於ける異狀……五九
一、後出血……五九

二、軟部の裂傷……六〇
三、腦貧血……六一
四、後陣痛……六二
第十四章　産褥の經過、褥婦の攝生法並に産褥中の異狀……六三
第一　産褥の經過……六三
第二　産褥中の攝生……六五
第三　産褥中に來る主なる異狀……六八
一、産褥中の發熱……六八
二、兩便の障害……七〇
三、乳房の疾患……七一
第十五章　育兒法……七三
第一　成熟兒の徴候及其發育狀態……七三
第二　兒の榮養及看護法……七五
一、榮養法の種類並に其優劣……七五
二、産後新生兒の取扱法並に授乳の時期……七六
三、母乳を禁ずべき場合……七七
四、授乳上の注意……七八
五、離乳……七九
六、其他の育兒上の注意……七九
第三　未熟兒の看護法……八二
第四　乳母の撰擇並に乳母の攝生法……八三
第五　兒の人工榮養法……八四
第十六章　乳兒の疾病……八八
第一　臍の疾病……八九
第二　眼の疾病……八九
第三　兒の發熱……九〇

第四　口内の疾病……九二
第五　耳の疾病……九二
第六　初生兒黄疸……九三
第七　胃腸の疾患（消化不良）……九四
第八　乳兒脚氣……九五
第九　腦膜炎……九五
第十　遺傳徴毒……九七
第十一　種痘……九七
第十二　實布的里亞……九八
第十三　麻疹……九九

母と子

醫學博士　土肥衛述

緒言

婦人は男子と異り姙娠、分娩（出産）、育兒等特別の役目を持つて居ります。從つて生殖器なども男子とは全く異つて居りますから常に一般衛生上の注意のみならず婦人固有の身體に關する攝生と病の養生法、姙娠、分娩、産後等に於ける養生法並に育兒の心得がなくてはなりませぬ。

以上の事柄を一々詳細に婦人にお知らせしたいのは山々でありますが、限りある紙面殊に醫學の素養の少ない人々に是等の事を一々會得させると云ふ事は到底不可能の事でありますから、茲には唯日常婦人が是非心得て置かなければならぬ主要な事のみに就てお話しする事に致しませう。

婦人の生殖器は外生殖器と内生殖器との二つに分れて居ります。外生殖器とは身體の表面に現はれて居る外陰部、陰門及び乳房などを云ふのであつて内生殖器とは骨盤の中にかくれて居る膣、子宮、卵巣、輸卵管などであります。尚ほ子宮を前後左右に引張つて居る靱帶が之れに附隨して居ります。而して陰門の奥が膣で膣の奥即ち上の方は子宮に連つて居ります。子宮は俗に子袋と云ひ胎兒の發育する處でありまして其口は圓く膣の中に突出して居ります。子宮及び膣の前には膀胱や尿道があり後と上には腸があります

又子宮の左右兩側には人間の卵を卵巣から子宮の方に運ぶ輸卵管一名喇叭管と、人間の卵を發生する鳩の卵位の卵巣と云ふ臓器があり、何れも腹膜と云ふ薄き膜で被はれて居ります。腰を取圍んで居る骨を骨盤と名づけます、婦人の骨盤は胎兒が出産する時に通過する道筋でありますから男子の骨盤よりも中が廣く丈けが短かく出來て居ります。骨盤が太ければ其れ丈けお產が樂な譯でありまして彼の女は御尻が大いなどと決して笑ふてはなりませぬ。

第一章　婦人生殖器の畸形（不具）

婦人生殖器の異常は先づ先天的即ち生れつきのものと後天的即ち生れて後に起る處のものとの二つに別ける事が出來ます。生れつきの異狀と云へば生殖器の畸形でありまして一つの不具者であります。此不具者の内には生殖器が全部欠損して居るものもあれば一部分欠けて居るものもあります。又一生嫁入りも出來ぬ樣なものもあれば嫁入りには差支へはないが月經もなければ子供も出來ぬと云ふ樣なものもあります其一部分の不具者の中には半陰陽と稱へて男であるか女であるか判然せぬものもあれば男女兩方の生殖器を具へて居るものもありますが、是等は至つて稀であります。其他重複子宮、重複膣等と云ひまして子宮が二つあつたり膣が二つあつたりする者もあります。又陰門が非常に狹いものやら全く塞がつて居る者などもありまして千差萬別でありますが、是等の中には醫者の手術に由つて常態に復する者が澤山ありますから、決して不具者であるから治療の出來ないものと悲觀するものではありませぬ。世間には不具者であると知りつゝも是を人に話したり診て貰つたりする事を恥ぢ、到底人並にはなれぬものと諦め一生涯心窃に煩悶しながら日を送る不幸な人が多い樣でありますが、是れは大きな間違であります。其治ると治らぬは醫師でなければ判底鑑別は出來ないのでありますから宜しく先づ醫師の診察を受け、手術し得られるものは手術を受け一生を幸福に送り度いものであります。

次に後天的即ち生れて後に起る處の異狀は殊に婦人の注意を要する處のもので多種多樣でありますから今其主なるものを順を追ふてお話しする事に致しませう。

第二章　子供に發する婦人病

一、陰門、膣、尿道炎

產婦人科醫の處に來る少女は多くは陰門、膣、尿道等の炎症であります。之等は第一に母或は父或は乳母子守等に淋毒其他の病があつて尿道又は外陰部、膣などから分泌物があり其分泌物で穢れた手指を以て子供の襁褓の交換をなし、或は直接穢れた手指を子供の陰部に觸るゝからでありまして、病毒は其局部に侵入し炎症を惹き起すものであります。又時としては少女の肛門の内に寄生して居ります蟯虫と云ふ長さ三四分の白い細長い恰かも白髮の樣な虫が肛門から外に匍ひ出し、其近傍を逍遙し、歸り路に戸迷ひして肛門に入る可きを間違へて陰門内に入り込み之れが爲めに炎症を起す事もあります。殊に又常に外陰部を不潔にし何日も入浴しないと云ふ樣な少女は此の病にかゝり易いのであります。

初めは陰門丈けに炎症を起すが間もなく膣及び尿道などにひろがるものでありまして、先づ陰門に瘙痒を覺ゑ、外陰部膣の粘膜は充血して赤くなり、後には少しく腫れ、多量の粘液樣の分泌物があり、次で粘膜は靡爛し、小兒は局部に灼熱樣疼痛を訴へ排尿の時に尿が局部にしみて痛み遂には局部から多量の膿汁を漏らす樣になります。病が愈々尿道にすゝむと度々尿意を催して便所にゆくも僅かに二三滴の小便を漏らすのみで其都度尿道から下腹へかけて痛みを感じ、時には熱が騰まり所謂消渴の症狀を現すのでありまして初期に充分の養生をしなければ病は膀胱にまですゝんで膀胱炎一名膀胱加答兒を起し、尿は濁り痛は烈しくなり後には慢性となり容易に治す事の出來ぬ樣になるものであります。

既に此の病を起したならば到底素人の自宅養生では治るものでありませぬから之を起さぬ前に豫防する事が肝要であります。誰でも子供の襁褓を換へた後では手を洗ふが換ゆる前に手を洗ふてかゝるものはない樣であります。之れは出來る事なら其前後に手を清潔に洗ひ穢れた手指を陰部に觸れぬ樣に心がけて貰ひ度いものであります。殊に白帶下が多いとか消渴の氣味があるとか淋病の疑ひのある人等は子供に接するに餘程注意せねばなりませぬ。而して子供は勿論親たち子守等に至るまで毎日風呂に入り陰部を清潔に保つと云ふ事は豫防上に最も必要な事柄であります。

若し肛門から蟯虫が匍ひ出る事があれば子供は頻りに肛門を瘙がるものでありますから其時注意して肛門を檢査すれば其虫を取り除く事が出來ます。尚ほ又此虫が寄生して居る疑ひがあるならば醫師に乞ふて虫下しを服用させねばなりませぬ。既に外陰部が赤くなるとか痛を訴へるとか分泌物があるとか異常を認めた時には手後れにならぬ間に醫師にかゝつて養生を怠らぬ樣にせねばなりませぬ。世間の人はよく子供を可愛がつて顏を拭いてやつたり頭を撫てやつたりしますけれども、陰部を拭いてやつたり檢査してやつたりする事はしない樣で、これでは眞に可愛いのかどうか判りませぬ。

第三章　月經及び月經時の攝生法

女子が十四五歲になりますと身體はよく發育し、生殖器も亦た之に從つて成熟し、卵巢といつて子宮の兩側にある人間の卵を貯へて居る臟器から成熟した卵を約四週間即ち殆んど一ヶ月毎に一個づゝ出して子宮の方に送るもので、是れを排卵と申します。此時生殖器は一般に充血して軟かくなり、排卵してから約二週間の後ち通常子宮から出血するものでありまして、是れを月經俗に月やく、不淨などゝ申します。

此月經は十四五歲に始まり四十五六歲から五十歲位までの間通常約四週間毎に繰り返して來潮し、其都度三四日から長くて一週間位續き其間に凡そ一合足らずの血液を失ふものでありまして、其時少しく腰が倦いとか或は緊るとか又人によつては輕い頭痛がするとか下腹が張るとか食餌が美味くないとか云ふ位の異常を感ずるものでありますけれども、之れが爲めに苦痛を感ずる樣な事はないものであります。處が月經が一ヶ月に二度もあるとか、出血が十日も其れ以上も續くとか、月經の度毎に下腹や腰が痛んで仕事の妨げとなるとか、出血の量が非常に多くて始末が出來にくいとか、或は之に反して非常に出血の量が少いとか云ふ樣な事があれば既に病的のものであつて醫師の診察を受け治療する必要があります。

月經は前に述べた樣に十四五歲位(日本婦人の月經は平均十四年八ケ月)に始まるのが通例でありますけれども土地人情風俗の異なるに從ひ甚だしい差異のあるもので、熱帶地方の婦人は十歲以下でも月經を見寒帶地方の婦人は大に遲れて十七八歲に至つて始まり、身體の發育の遲れたものや虛弱なものなどは漸く十八九歲に至つて始まり、又一旦十四五歲で始まつた月經も二三ケ月の後再び暫く休止すると云ふ樣な事もあります。殊に脂肪過多と云つて强く肥滿した婦人は月經の少ないのが通例であり、時には全く月經が止んで仕舞ふ事もあります。是等は强ち病的とのみ看做す事は出來ませぬ。

又目下女學校に通學中のものや年若き未婚の婦人などが月經異狀の爲めに婦人科醫の門を叩く者が澤山ありますが、之を診察して見まするに子宮が後に屈んで居る子宮后屈症、子宮粘膜の糜爛して居る子宮內膜炎、子宮口の狹少なもの等病的のものもありますが、中には唯だ生殖器が一般に充血して居ると云ふ迄にて格別病的變化のない者が見受けられます。之等は近年女子の敎育が西洋風となつて室內に蟄居して居るものが少なく、ブランコに乘つたり遊動圓木に上つたり、驅け足をしたり舞踏をやつたり、汽車、電車自働車等に乘る機會も多く、稀には婦人が飛行機に乘つて宙返りを演じたりする樣になり、體操の時間などでも敎師の前に出て月經ですから見學さして下さいと屆け出で課業を休む事が恥かしい處から出血の多からぬ限り勉めて休まないと云ふ樣な事が動機となつて、此月經異常を訴へる樣になるのではないかと思はれます。併し從來習慣となつて居ります月經時の不攝生が確かに今日日本に於ける婦人病の原因の一つをなして居る事は間違ひありませぬ。

月經時には平素と異なり生殖器は一般に充血して軟かくなり身體、精神共に違和を感じ、外界からの刺戟に對しまする抵抗力が減退するものでありますから、萬一此場合に生殖門から病原菌(病を起させる總ての黴菌)が侵入する樣な事があれば其黴菌は好んで此內に蕃殖して僅かの間に種々の炎症を起す樣になります。故に斯くの如き場合にこそ出來る限り病原菌の侵入を防ぐ事に努めねばなりませぬ。然るに婦人の多くは月經に際しまして其血液を吸收させる爲めに紙、綿、ガーゼ等を膣內に挿し込み栓塞して何時間も之を取り換へないのが常であります。處が黴菌は小さくて肉眼を以て見る事は出來ませぬけれども、常に綿や紙片等に澤山附着して居りまして栓塞の際膣內に送り込まれるのであります。又月經中にも拘らず多數の人の混浴する錢湯に平氣で行き、掛り湯をすると汚れたる湯をくみ出して膣の中までも洗ふ人が澤山ありますが、多くの浴客の中には淋病やみもありませうし黴毒かきもありませうから、月經中に此湯に入るのは求めて病原菌侵入の機會を作るもので實に危險千萬であります。これは病院へ來る患者で月經後此病が起つたと訴へる者の多いのを見ても明かであります。殊に氣候の變り目に於てかゝる病人が多く現はれる樣であります。故に月經中は成るべく身體を安靜にし、夜は充分に眠り、生姜、唐辛、山椒、芥子、蜜柑、橙の如き刺戟物をさけ、酒類を飲まぬ樣にし、消化し易い食物を攝り、腹部や腰部を溫かに保ち、綿、紙、ガーゼ等を膣內に挿入する事なく、入浴を止め、淸潔な脫脂綿を外陰部に壓抵して猿股又は月經帶或は半巾の越中褌(所謂丁字帶)を以て之を固定し、血液を吸收させ度々之を新らしいものと取換へ且つ屢々湯に浸した淸潔な布片にて外陰部を拭ひ淸潔に保たなければなりませぬ。醫者が藥をつけて膣內

に挿入する綿即ちタンポンでさへも五六時間以上之を取り出さなければ害をなし、久しく之を放つて置きますと膣内にて腐敗し惡い臭氣を放つ樣になります。況してや藥を含まない紙や綿は其質が粗造で歩行する時等に粘膜を荒し、且つ僅かの間に腐敗し、時としては之を取出す事を忘れ惡臭ある帶下が下る樣になつて驚いて醫者にかゝり、之れが膣内に置き忘れた紙片や綿の爲めである事を説明せられて始めて氣がつく樣な事もありますのみならず、其紙や綿が腐敗した爲めに熱を出し此れが爲めに腹膜炎などを起して遂に命をとらるゝ事もあります。陰部の事を股倉と申しますれども決して物を入れて置く倉ではないと云ふ事を御忘れにならぬ樣に願ひます。

第四章　結婚に對する注意

結婚と云ふ事は婦人一代中の重大事でありまして、之れが爲めに女の身体にも精神にも一大變動を來しますもので、輕々しく結婚した爲めに取り返しのつかぬ不幸に陷ることが多々ありますから、今其注意すべき事を少し述べて見ませう。

發育が佳くて健康な婦人ならば二十歳位から二十一三歳までの間に結婚するのが適當と思ひます。古來我國には結婚を急ぐ傾があつて、之が爲めに難産したり弱い子供を生んだりすることが尠なくありません

結婚は女の精神、身体に一大變動を來すものでありますから、潛伏して居る結核の如きは結婚した爲に其病勢を逞ふする事が多くあります。又花柳病に罹つて居る男子が其根治せざる以前に結婚しますならば忽ち其病毒を新婚の婦人に感染せしめて炎症を起しますのみか、之れが爲に一生涯子寶を得る事が出來ない樣な不幸に陷らしめます。又高年に至つて結婚しますとお産の時子供の通過すべき産道が硬くなつて居る爲にお産に長い時間がかゝり、難産をなし或は局部に破裂を來す恐れがあります。殊に結婚の時期を失すれば一般に神經質となり、「ヒステリー」の如き病を起すことが多くあります。故に結婚は年齢を標準とせず其人の發育の程度と健康狀態に由て定め、結婚前に双方醫師に頼んで健康診斷を受け異常のない時にせねばなりませぬ。若し肖て肺尖加答兒や肋膜炎や、腹膜炎や其他結核性の病や、花柳病に罹つた事のある人は充分に養生をして病の根がきれ結婚しても差支へがないと云ふ醫者の證言を得て始めて婚約を取り結ぶべきものでありまして、決して良緣だからと云ふて時期を誤つてはなりませぬ。健康なる胎兒は健康の婦人に胎り、虚弱なる夫婦は虚弱なる子女を擧げ、國家の盛衰に關するものであることを忘れてはなりませぬ。殊に結核の素質ある人間は一般に恰悧で、情熱的で、結婚を急ぎ性交を喜び、自から自分の生命を縮める事が多い樣に思はれます。

第五章　花柳病

花柳病とは淋疾、黴毒、軟性下疳の三つを云ふのでありまして、是等の病は花柳り巷に出入するものが娼婦等から感染して來るから花柳病と云ふ名が附けられたのであります。

一、淋疾

淋疾は花柳病中で最も多く人の罹る處の病でありまして、獨逸の學者ナイセルと云ふ人が發見した丁度饅頭を二つ合した樣な形をした淋菌と稱する黴菌に由て發するものであります。

婦人が淋疾を患へて居る男子と交はる時は直ちに感染するのでありまして、先づ陰門及び膣に感染し、黴菌は此處に於て俄かに繁殖し、感染後數日の後淋毒性陰門炎、淋毒性膣加答兒、尙ほ進んで淋毒性子宮頸管加答兒、子宮內膜炎、子宮實質炎、輸卵管炎、卵巢炎等を起し、尿道に入れば尿道炎次で膀胱加答兒腎盂炎等を起します。其れのみならず、此黴菌が眼につけば淋毒性膿漏眼、俗に云ふ風眼を起して盲目となるものが非常に澤山あります。其他淋毒性の白帶下が肛門に流れて附着する時は肛門病をさへ發し、且つ淋病の病毒は遠く關節に迄侵入し是れが爲めに淋毒性關節炎を起し、殊に好んで膝や股の關節を冒して歩行困難となり一生涯跛となつて終るものが決して少なくありませぬ。

二、黴毒

是も淋毒の樣に主として男女性交の際傳染するものでありまして、「スピロヘータ、パルリーダー」と云ふ螺旋の樣な形をした黴菌に由て起るもので、交接の時に男女何れか一方に病毒があるならば他の一方の陰部の皮膚や粘膜に於ける小さな疵から病毒が侵入するのであります。其れのみならず病毒のあるものと接吻したり或は病毒あるものゝ茶碗、盃、煙管、手拭等に由て間接に傳染する事もあります。

黴毒の病狀には一期症狀、二期症狀、三期症狀と云ふ區別がありまして、感染後早きは十日位遲きは三

四週間の後其毒を受けた部分、普通陰部に小さな豆粒位の痛くも痒くもない硬い凸い疣の樣な硬結が出來其中央部の表皮が剝れて少しづゝ液を分泌する樣になり、遂には一つの硬い潰瘍となります。之を硬性下疳と申します。（接吻に由て感染した場合には口唇に同樣の症狀が現はれます）次で其周圍の淋巴腺即ち陰部から病毒が侵入した場合には鼠蹊部の腺が腫れて大きくなります。之を横痃俗に横瘡と申します。此ものは後に述べる軟性下疳症の時に出來る横痃と異つて、膿にならないで段々後には身体中の淋巴腺に其病毒が蔓延しますから、頸や腋窩や肘の內面あたりの腺腫で醫者には直ちに此人には黴毒があると云ふ事が判然致します。以上の硬性下疳と横痃とを起すまでを第一期症狀と申しまして五週間乃至十週間かゝります。以下六週乃至數月の後全身の皮膚又は粘膜殊に陰部並に肛門の周圍に薔薇色の發疹が出來、次で一兩日の後其ものが暗褐赤色に變じ、痒くも痛くもないが其消滅する迄には數ヶ月かゝります。殊に陰門及肛門の周圍に出來た疹は太くなり、且つ數個一つになつて輪狀又は半輪狀の五厘銅貨位の凹き濕氣ある腫物の樣になつて久しく治りません。然るときは之を扁平贅肉（扁平コンヂローム）と申します。是等の症狀を黴毒の第二期症と唱へ、次で第三期に移ります。

黴毒に感染してから早きも半年位普通は一二年の後第三期症狀が現はれて來るものでありまして、主な徵候は皮膚、骨、內臟等に護謨腫と名ける腫物を生ずるのであります。先づ皮下に豌豆大から胡桃大の稍硬き丸き腫物が出來、後に自然と破潰して大きな潰瘍を造り、其表面には不潔なる豚脂樣の物を附着し、容易に治らないのみか段々周圍に蔓延し遂には骨膜及骨までも侵蝕するのであります。又初めから骨膜や

骨や關節を冒して來るものもありまして、神經痛の樣な或は癘風窒斯の樣な痛みを發し、關節は腫れ、骨には所謂護謨腫を生じ、其部の皮膚は腫れ上つて暗青赤色となり、遂には骨が壞死して取れる樣になるので、能く鼻の骨を冒し之れが爲め鼻が低くなつたり鼻が除れたりして、楊貴妃の樣な美人と云はれた婦人も鼻がなくなつたり、額の骨に穴があいたりして見る影もない樣になるものが澤山あります。又內臟を冒し或は腦、脊髓を冒して遂に死を招くものが少くありません。加之ならず黴毒のある人が姙娠すると後に御話する樣に胎兒は中途で死亡し、流產したり早產したり致します。幸に無事な子を生んでも遺傳黴毒の爲に死するか、又は虛弱な人になります。

三、軟性下疳

軟性下疳も亦た交接の際感染する處の傳染病でありまして、黴毒の如く人の生命を取る樣な事はありませぬけれども能く人から人に傳染するもので、軟性下疳菌と云ふ黴菌が其原因となるのであります。軟性下疳は感染しますると二三日の後肛門の周圍に一個乃至數個の粟粒位の腫物が出來、間もなく其れが破れて潰瘍となり汚い分泌物を生じます。黴毒性の硬性下疳と異る處は、黴毒の如く硬くないことと黴毒は痛みがないが軟性下疳には多少の痛みがあることであります。而して數日の後鼠蹊部の淋巴腺が腫れ所謂橫痃を生じます、此橫痃は黴毒の橫痃と異なり強く腫れ上つて遂に膿を持ち自然に破れて膿を漏す樣になることであります。其膿が附着すれば何處にでも下疳と同樣な出來物が致します。茲に忘れてならぬことは軟性下疳は屢々黴毒と同時に發することで、硬性下疳と軟性下疳とが混合して發し軟性下疳であらうと思ひ局處的の處置のみして居る間に黴毒は全身に蔓延して取り返しのつかぬ重症に陷ることがあります。

第六章　主として中年期に發する婦人病

女の大役である處の姙娠、分娩、產後に於ける變化の外婦人病の大部分は皆此の中年期に起るものと見ても差支へのない位でありまして、從つて其病の種類症狀等も色々でありますから、到底是を悉く詳しく說明する事は出來ませぬ。故に其中で吾々が日常多く接しまする處の病を列記致しませう。

い、陰門炎、膣加答兒、バルトリン氏腺炎

是れは小兒期に起る陰門及び膣の炎症と全く同一のものでありまして、主として淋毒の感染に由て起ります。陰門及び膣の粘膜は爲めに充血して赤くなり、或は腫れ上り、殊に膣の粘膜は粗糙になつて之に觸るゝと恰かも砂でも撒てある樣に感じ、或は靡爛し、初めは粘液樣後には多量の膿樣の分泌物がありまして、初め局部に瘙痒を感じ後には灼熱樣の痛を發します。殊に急性のものに在りましては往々熱發し排尿の時に痛みを感じます。初めに養生を怠りますか或は養生の宜しきを得ませぬ時には遂に慢性となるものであります。

愈々慢性となりますと、熱は下り痛も輕く或は全く痛まぬ樣になりますけれども、分泌物は止まず容易に治らぬ樣になるものであります。以上の陰門炎、膣加答兒の經過中には、屢々陰部の兩方又は一方のふ

ち即ち陰唇が強く腫れ上つて疼痛が甚だしく、歩行さへ出來ぬ樣になり膿をもち、醫者の切開手術に由つて治るか或は遂に張り破れて多くの膿を出す事があります。是をバルトリン氏腺炎俗に陰腫れと申します大分陰唇が膨れて肥ゑて來たなぢゝ喜んで居たら間違です。早く醫者にかゝつて其腫れを引かさなければなりませぬ。

ろ、子宮實質炎

子宮實質炎とは子宮を造つて居る筋肉内に病毒が侵入して炎症を起させた處のものでありまして、子宮全体が腫れて太くなり疼痛を感じ、殊に急性のものは其痛み烈しく出血を來し子宮の腫れも強く時としては姙娠して居る子宮の如く下腹に硬結物となつて膨れ上る事もあります。慢性のものは其痛みも輕く急性症が充分に治らず慢性となるもので經過がなか〳〵長いものでありますが、此の子宮實質炎は多くは次に述べまする子宮内膜炎と合併して來るものであります。

は、子宮内膜炎、頸管加答兒

子宮内膜炎と申しますのは、子宮の内面を被ふて居る粘膜に炎症を起し遂に糜爛するのでありまして、之にも急性症と慢性症とがあります。急性のものは痛みも強く熱も出で、子宮内からは粘液膿樣の多量の分泌物があり、又屢々出血を來します。痛みは下腹から下肢並に腰部に放散し、月經は不順となり且つ月經時に疼痛を伴なひ其血の分量も多く遂には慢性症に移り行きます。慢性になると前に述べました症狀が急性症の樣にひどくはありませぬけれども何時迄も何時までも其症狀が續き、姙娠する事などは殆んど出來ぬ樣になり、婦人は常に頭痛がするとか腰部が倦いとか下腹が張るとか便通の工合が惡いとか、俗に云ふ血氣血の道の症狀を起して一日たりとも愉快に日を暮す事など出來ぬ樣になります。若し又子宮の入口だけが炎症を起した時には之を頸管加答兒と云ひ、頸管加答兒が奥に入り込んだのが内膜炎であります。

に、卵巣炎、輸卵管炎（一名喇叭管炎）、子宮周圍炎

卵巣炎とは子宮の兩側にあつて人間の卵を貯へて居りまする卵巣の腫れを云ひ、輸卵管炎一名喇叭管炎とは子宮の兩側にあつて卵巣から出て來る卵を子宮の方に送りやる管の炎症であります。子宮周圍炎とは子宮や輸卵管や卵巣等を取り卷き包んで居る組織並に腹膜の炎症を云ふのであります。此の三つの病は別々に起る事もあれば一度に發する事もあります。是れ等の病も亦た急性と慢性との別があり、急性の間は病が劇烈で痛みも烈しく熱も高く上り、下腹から下肢並に腰部に牽きつる樣な痛みを感じ足が牽きつつて歩行が自由に出來ず、陰部からは不正の出血があり又澤山の帶下が下ります。病が次第にひどくなりますと下腹に硬結が出來て、其硬結は段々上の方に太くなり、之を押しますと烈しく痛み、遂には其硬結の中が膿となり腹の中で破れて急性腹膜炎を起し死ぬる事もあり、或は自然に炎症が腹全体に擴がりまして急性腹膜炎となり死ぬる事もありまして實に恐ろしい病であります。慢性症は急性のものが永びいたもので、

急性の様に症狀は劇烈ではありませぬが腹の硬結なご何時までもこけず、痛みも去らず、出血や白帶下が止まず、月經は不順ごなり月經時の痛みも甚だしく、且つ時々慢性のものが俄に急性にかはり生命をごる事もありますし、それ程でないまでもなか〳〵治癒しにくい病でありまして、到底姙娠する事なごは出來ぬ樣になるものであります。

ほ、子宮の後轉、後屈、左傾、右傾

元來子宮ご云ふものは下腹の底で腰の骨の中にかくれて居り、陰門から指を深く入れて見まするご漸く指尖が丸い子宮の口に屆く位の高さにあります。其形ちが丁度長茄子の樣でありまして上は太く下は小さく、長さが曲尺で二寸五六分重さが七匁か八匁位のものであります。而して子宮の口は少しく後ろに向い子宮口の上部即ち子宮体の處は前に傾いて居るのが普通であります。處が過度の運動をするごか産後の養生が不充分であるごか、或は子宮周圍の炎症で子宮が牽きつけられるごかするご子宮体が後ろに傾き子宮の口は前に向ひ、或は子宮が右や左にひきつけられる事があります。此の樣に子宮が後ろに傾いたり右や左にひかるゝ樣な事があるご姙娠が困難ごなり、月經の時に痛みが起り、常に下腹が重くるしく腰が張り頭痛や眩暈が起り、兩便の通じが惡るくなり、下肢が牽きつり、月經が長びき出血が多くなり、胃腸の工合が惡くなるなご色々の障害が始まり、たま〳〵姙娠しても子供の位置が惡く姙産の原因ごなり、婦人は甚しく神經質ごなり、少しの事を氣にして怒たり泣たり眞に「ヒステリック」になります。

へ、子宮下垂、子宮脫、膣脫

過度の運動、産後の不養生、出産時に外陰部に裂傷を起し之を自然の治癒に任せたご云ふ樣な事で子宮が下にさがり時には子宮の口が陰門の外に現るゝ樣になる事があります。又膣の粘膜即ち内面の皮が脫肛ご同じ樣に外に飜へつて出る事があります。此の樣な時は下腹が常に重くるしく、且つ歩行の際下腹から下肢が牽きつり腰がはり、外陰部に常に物が狹まつて居る感じがするのみならず陰門から常に丸いものが出て來る所謂俗に云ふ茄子を生じます。之れが爲めに月經は不順ごなり帶下は多くなり、姙娠は出來にくゝなり、幸に姙娠しても屢々流産する事なごがあつて誠に不快な病氣であります。

と、尿道炎、膀胱加答兒、腎盂炎

尿道炎一名尿道加答兒は尿道の炎症でありまして俗に消渴ご申します。之は淋病の毒が陰部から尿道に入つた爲に起り、又他の原因殊に産後、感冒等に由て起る事もあり、化膿菌ご云ふ黴菌や大腸菌ご云ふて腸の中の黴菌が侵入したために起る事もあります。之にも急性ご慢性ごがありまして、急性症は症狀が烈しく頻りに尿意を催しまして度々小便に往きたくなり、便所に往つても尿は格別出ずに尿道から下腹にかけて痛を覺ゑ、時ごしては熱發し小便に血を混ずる事さへあり、尿道からは初めに粘液後には膿をもらす樣になります。早く此の急性の間に病を治しませぬご遂に慢性になり、前に述べました容態が何時迄も治らず、後には膀胱加答兒一名膀胱炎を起す樣になります。

膀胱加答兒も亦た尿道炎と同じ原因にて起り、其症狀もよく似て居り、尿道炎と同時に起る場合も多いのであります。つまり膀胱加答兒は尿道炎が奥の方に入り込んだものであると見て差支へのないものであります。即ち度々尿意を催し排尿時に痛みを覺ゑ、小便は大變に濁り膿を交へ時としては血の小便をもらし、不正の熱を出しますのみならず下腹に痛を感じるか或は何となく下腹が重くるしく感じるものでありまして、急性の間は症狀が劇烈で、慢性になると症狀は幾分輕くなりますが容易に治らない樣になり困るものであります。此膀胱の中の黴菌が今少し進んで上の方にはいると腎臓の出口の腎盂と云ふ處に炎症を起し腎盂炎と云ふものになります。腎盂炎は惡寒がして非常に高い熱を出し、「マラリア」と間違へられたり「チブス」と間違られたりして一旦治つても屢々再發し實に厄介な病でありまして、殊に姙娠中や產後によく此病になることがありますから注意せねばなりませぬ。

第七章　主として中年期に起る婦人病の原因

前に述べました種々の婦人病の原因を總括して見ますると感冒、運動過度、暴飲、性交過度、手淫、月經時の不攝生、姙娠分娩產後の不養生、淋毒其他化膿菌と云ひまする膿を造る黴菌、大腸菌と云ふ腸の中に居る黴菌などの侵入によるもの結核菌によるものなど色々でありますが、特に注意しなければならぬものは花柳病殊に淋毒の蔓延であります。西洋の或る學者などは婦人病者百人中四十人迄は花柳病から來たものであると云ふて居りますが、日本ではそれ以上である樣に思はれます。此花柳病殊に淋毒の蔓延は其罪が多く男子にあるものであります。男子の多くは酒興に乘じて花柳の巷に足を踏み入れ或は淫奔の女に接して此病毒に感染するのであります。處が此の病は一度感染しますると容易に一朝一夕で治るものでなく、自分では全く治つた樣に思はれても其病毒は身体の何れかに潛んで居て氣候の代り目、暴飲、過勞、其他房事過度等の動機によりまして其病勢を强め、遂には之れを最愛の妻女に感染せしめるもので、妻女は此爲に子寶を得る事が出來ないのみか四時常に病褥に親む樣になり、唯の一日も爽快な顏貌をする事がなく、夫は此の顏を見て不快に思ひ、終に家を外に樂みを求めやうとし、淫行は益々募り、初めは琴瑟和合し他人も羨んだ夫婦の間も圓滿を欠ぎ、風波の絶間なく遂には破鏡の嘆を見る樣な事になります。實に嘆はしい極みであります。

第八章　主として中年期に起る婦人病の徵候

中年期に於ける病は略其病名を上げ且つ症狀の大要をも述べて置きましたが、多くの症狀は一般婦人病に共通性でありますため、是等の病の鑑別は醫學の素養に乏しい素人にはなか〳〵出來るものではありませぬから、醫師の診斷を受けて確定せねば仕方がありませぬ。素人には唯だ斯樣な容態が現れたら病である、養生をせねばならぬ、と云ふ事を知らせる方が却つて便利であると思ひますから、重複をも顧みず茲に再び一般婦人科病に現るゝ症狀と障害の重要なものを上げる事としました。

い、白帶下（こしけ）

白帶下とは俗に云ふ「コシケ」の事でありまして陰門、膣、子宮から分泌する水の樣な又は粘液の樣な或は膿の樣な分泌物を云ふのであります。元來婦人の陰部は男子の陰部と違ひ常に粘滑で濕氣を帶び、決して乾いて居るものではありませぬ。而して常に透明で粘稠な水樣液を斷わず分泌するものであります。故に此の透明な粘稠液を多量に分泌するからと云つて決して病氣ではないのでありますが、若しも此液が粘り氣を失ひさら〳〵となり白く濁り又は黄色を帶びて膿の樣になり、或は青みを帶ぶるか血液を混ずるか、尙ほ其上に其帶下に厭な臭氣でもある樣になれば其れこそ病が一層重いしるしでありまして直ちに醫者にかゝる必要があります。此の白帶下は陰門の炎症を始めとし、前に述べました子宮、卵巢、輸卵管の炎症は申すに及ばず子宮の位置の異常など總ての婦人科病に起る處の症狀であります。

ろ、月經困難、月經不順、月經過多及月經閉止

月經は前にも述べました如く凡そ十四五歲に始まり、四週間目位に反復し、其都度二三日から四五日位宛つゞき、血液の量は全部合せて五勺から一合足らずであります。けれども月經來潮の餘りに遲いのは生殖器の發育が惡いのか或は潛伏性の結核等に因る事が多いのでありますから、注意しなければなりませぬ

正常の月經に於きましては唯だ頭が重いとか少し下腹や腰がだるいとか、張るとか、食事が美味しくないとか、物事が氣になり易いとか云ふ位の事で、別に苦痛を感じる程の事はないのでありますが、若し子宮、卵巢、輸卵管、子宮周圍の炎症等を起すとか、子宮が後屈したとか、右又は左に傾いたとか或は下垂したとか、子宮の口が小さくなつたとか云ふ樣な異常が出來て來ると、月經の時に非常に下腹や腰が痛み、頭痛や眩暈が起り、下肢が牽きつるとか、血液の量が非常に多くなり其血液も凝固して塊になつて下りるとか、飯が喰べられぬとか云ふ樣な種々な容体が生じまして仕事も出來なくなり床につかねばならぬと云ふ樣になります。之れを月經困難と云ふのであります。尙ほ又月經は早くなつたり、或は遲れたり、時としては一ケ月に二度もあつたり一ケ月も二ケ月も飛んで見たり、又俄かに澤山あつて見たりして非常に不順となり、又時には非常に多量の出血が何日も續くと云ふ樣な事も起る事があります。之に反しまして月經が非常に少くなつて幾月も全く止まつて仕舞ふ樣な事もあります。此の樣に月經が非常に少くなつたり幾月も全く止まつたりするのは、婦人科病の外に永く熱病に罹つた後とか、結核の樣な慢性病に罹つて居るとか、身体中に非常に血の少ないもの即ち貧血病を患つて居るとか、身体が非常に肥滿して居るものなどに能く起る異常でありますから、其原因を醫師に確かめて貰はなければなりませぬが、若し夫のある平素健康な人で毎月缺さず見て居つた月經が突然止つた樣な場合は先づ第一に姙娠ではないかと云ふ事を考へねばなりませぬ。

は、子宮出血

月經の來るべき時でないのに子宮から出血があるのは多く子宮、卵巢、輸卵管などの急性炎症だとか若しくは子宮の位置の異常から來るもので、若し以前に月經が止まり姙娠の疑ひのあつたものが出血を始め

たら先づ流産を疑はねばなりませぬ。而して一般に子宮の出血があるものは下腹や腰が痛むこか張るこか云ふ事を伴ふのが通例であります。

に、下腹及腰部の疼痛、下肢の牽引痛、下腹及腰部緊満の感並に倦怠

下腹や腰部が痛むこか、下肢が牽きつるこか、下腹や腰部が緊満した様な感じや、下腹や腰が倦るいこ云ふ事は總ての婦人科病に現れる容體でありまして、其烈しいのは多く急性の炎症に起るのでありますが左程でもないものは慢性の炎症にかゝつた場合であります。

ほ、下腹の硬結

子宮や卵巣に腫瘍が出來た時には申迄もなく下腹に硬結を觸れますが、是れは又別に委しくお話しする事にします。其外子宮や卵巣、輸卵管又は子宮周圍の炎症でひどく腫れ上りますこ下腹に硬結を觸れる様になります。此のものは其の觸れる時痛みを感じ發熱を伴ひ稀には其硬結物を動かせば動く事もありますが大抵は堅くて動かないものであります。又時こしましては甚しく大便が秘結する人なご宿便こ云ひまして大便が塊になつて下腹にふれる事があり、又稀には膀胱に小便が一ぱい蓄積つて居るのを下腹に塊が出來たものこ誤診る様な事もありますから、注意しなければなりませぬ。

へ、發熱

婦人科病で發熱致しまするのは唯だ急性の炎症の時か又は何處か腫れの奥に膿が蓄積つて居る様な場合でありまして、熱こ共に下腹や腰の痛みを伴ふのが通例であります。又結核性の婦人科病も熱のさしひきが著しいものであります。

と、兩便の通利障害

小便即ち尿は時に著しく濁り又往々血液を混じる様な事があります。これは多く膀胱及び尿道の病で時こしては腎臓の病を起したものでありまして、此際屢々尿意を催し便所から歸りまするこ又直ぐに便所にゆきたくなり、便所に往つても僅かに二三滴の尿が出るばかりで其都度下腹から下肢並に腰の方にひろがる痛みを覺ねて排尿する度に身ぶるいする程つらく、時こしては尿淋瀝こ云ひまして知らず識らずの間に小便がチビリチビリこ少しづゝ尿道から出かける事もあり、或は又小便が出にくゝてウンこ氣張らぬこ出て來ぬ様な事もあります。又稀には尿閉こ云ひまして半日も一日も全く小便が出ぬ様になり、器械で取らなければごんなに努責しても出ない様な事もあります。これ等は尿道膀胱の病だこか子宮が後屈して居るこか、子宮や卵巣なごが腫れて膀胱や尿道を壓迫した場合、又は下腹内に塊のあるもの即ち腫瘍なごによるものであります。又子宮脱、子宮下垂も尿道や膀胱を壓迫しまして屢々尿意を催しますこか尿閉を起すこか云ふ様な障害を來す事があります。

大便は秘結するものもあれば下痢するものもあります。子宮、卵巣、輸卵管の腫れたもの子宮周圍炎な

ことは屢々便意を催し便所に往つても其割合に出ないと云ふのが多いのでありますが、又ひどく便秘するものもあり、子宮の後に傾いたもの子宮の下垂したもの脱出したもの子宮や卵巣に腫瘍の出來たものなどは其壓迫によりまして大便の通る路が狹くなり爲に秘結するのが通例であります。又人によりましては月經の度に下痢するものもありますが是れは全く反射的のものでありまして別段心配するには及びませぬ。

ち、不姙症（うまず）

夫婦になつても五年も十年も子供の出來ないものを不姙症俗に「うまず」と稱へ、百の夫婦に對して十五の不姙を見る割合になつて居ります。これは前に申述べました總ての婦人科病かつのりますと、皆此の不姙症の原因となりまして子寶を得る事が出來ませぬ。從つて家庭は圓滿を缺ぎ樂しく此世を送る事が出來なくなります。此の不姙症は主に婦人の生殖器の異常に原因するものとは申しますけれども、決して婦人だけを責めるわけには參りませぬ。何故かと申しますと、「うまず」の原因は主に淋毒でありまして、某統計家の調査によりますと、不姙の婦人百人中九十人迄は淋毒が原因をなして居り、不姙の四分の一は男子に基因すると申します。此の淋毒は多くは夫が他から持つて歸つた妻君への御土產であります。それのみならず男も淋病に罹ると能く睪丸炎と云ひまして睪丸の腫れを起します。若し兩方の睪丸炎に罹る樣な事がありますならば、精虫即ち子種が非常に少くなりますとか或は全く子種が欠乏いたします。それですから不姙症の原因を調べます時には、妻君に生殖器病のありなしを檢査するのも必要でありますが一方では必ず其夫たる人の精液をも調べて子種（精虫）のありなし、それが強いか弱いか等を知らなければなりませぬ。妻君の不姙症の原因が多く淋毒のたゝりであり其淋毒が主人のお土產であると致しますならば、主人も又妻君の生殖器病に就て充分の責任を負ふて養生をさせなければならないわけではありますまいか、それに自分の家内は病タレだなどと云ふて一向顧みない樣な夫があらば決して其罪を許す事は出來ませぬ。多くの不姙症の中には稀に生れつきで治療の出來ないものもありますが、多くは治療すれば治るものでありますからウマズだからと云ふて放置しておくのは愚の至りです。

り、神經症狀

婦人の生殖器と神經とは、非常に密接な關係があるものでありまして、婦人科的の病にかゝりますと、子宮が惡くても卵巣が惡くても又他の處がわるくても、皆其經過が長びく間には頭痛がするとか、眩暈が起るとか腰が痛むとか、夜が寢られぬとか、頭が重いとか肩が凝るとか、手足が痺れるとか種々雜多な神經症狀を發するもので、神經は過敏になり少しの事にも感じ易く、僅かの事で泣いたり笑つたり、時としては氣分が鬱いで人中に出るのを嫌ひ、又時には半氣狂ひ見た樣になり稀には眞んとに發狂する事さへあります。此の樣な容態を俗に血氣とか血の道とか或はヒステリーとか云ふのでありますが、これ等は殆んど皆此の婦人科病の結果であると見て差支へない位であります。

第九章　一般婦人科病の豫防法と其攝生法

平素健康な婦人は申すまでもなく、殊に其病に罹つて居るものは過度の運動をさけ新鮮な空氣の中で適度の運動を營み、手淫だとか房事過度とか云ふ事のない樣に、殊に身体の疲勞した時とか酒を飲んだ後などは性交を愼み、下腹や腰を温かに保ち、屢々入浴して身体殊に陰部が不潔にならぬ樣に心がけ、月經中には入浴を禁じなければなりませぬ。而して月經中でも月經中でない時でも膣内には一切綿や紙片、布片などを挿入する事なく、月經又は子宮出血などのある時には假へ心持ちが惡るくても外陰部に清潔な脱脂綿かガーゼを壓抵し、半巾の越中褌即ち丁字帶又は猿股、月經帶等を以て固定し食物は消化し易いものを攝り、酒類を愼み、若し俄かに下腹が痛むとか熱が出て多量の白帶下が下るとか、度々尿意を催して便所に通ひ排尿の時に痛みがあるなど子宮、卵巣、膣、輸卵管の急性炎症、子宮周圍炎、尿道膀胱等の急性炎症の疑ひがありますならば、直ぐに醫師の治療を受け、傍ら下腹を氷で冷し、身体を安靜にして床につき決して運動などをしてはなりませぬ。此の樣な時には腰湯をするとか湯に入るとか下腹を温めるとか云ふ事は絶對に禁じなければなりませぬ。そして食物は絶對に流動食で粥汁、牛乳、かたくり、卵黄等を攝り固いものを禁じ、鹽辛いもの酸ぱいもの、生薑、胡椒、芥子などの樣な刺戟物をさけ、酒類を愼まねばなりませぬ。總て口に入れてシム物は皆小便に出てもシムものと思はねばなりませぬ。慢性の病になりますと、下腹を温める事が必要で、温泉に入湯に出かける事などは非常に有効でありますが、これらは一々醫

師に相談し其指圖に從ふべきもので、温めるも冷やすも其用ふる時期を誤りますと反つて非常に害をするものであります。白帶下多ければ屢々陰部の糜爛發疹等を來しますから常に清潔に保ち、時々五十倍の硼酸水又は百倍の重曹水等を以て洗ひ、外陰部が糜爛したならば硼酸水で洗つた後に等分の亞鉛化澱粉を撒布し傍ら醫師の治療を乞ひ、出血甚しき時は絶對に安靜を守り、下腹を氷で冷やし、多くの清潔なる脂綿や綿紗を外陰部に當て堅く丁字帶を施こし醫師の來診を乞ひ、若し出血多量にして醫者の來るまで待つ事の出來ない時には、急救處置として清潔なる脱脂綿か綿紗を以て膣内を栓塞し、且つ下腹を小さい帶で堅く縛り下腹に至る血液を少なくする必要があります。神經症狀に對しては原因たる婦人科病を治さねば駄目ですから早く醫師の治療を受くる事とし、一方にては新鮮なる空氣中に適當の運動を營み、精神々經を刺戟する小説其他の讀物を避け、多人數群集の中に交はらず悲しき芝居見物の如きは禁じ、悲慘なる世の出來事を耳にせざる樣に心懸けねばなりませぬ。又平素便秘するものは石鹼水か倔利設林の浣腸を行ひ或は倔利設林座藥をさし、能く熱したる果物か煮たる果物を食して自然便通を圖る樣にし、下痢あるものは腹部を暖かに保ち、粘滑にして柔軟なる食餌をとらねばなりませぬ。不姙症の人は其病を治すのみならず、男子の精虫は普通酸性反應を呈する膣内の分泌液中に於て間もなく死にますから、百倍の重曹水で膣内を洗ひ亞爾加里性として精虫の生活力を助くるが宜しくあります。

以上述べました樣に總ての婦人科病の原因は大抵花柳病の感染によるものでありますから、極力之を豫防する事に勉めなければなりません。其豫防法は一言で足りる事でありまして、先づ出來る限り傳染の機

會をさけ、之に冒された男子は是非共醫師の治療を受けて之を撲滅し、醫師から其病根の全く絶ねた事を證明せられて後ち初めて結婚し、既に結婚した男子が一度花柳病殊に淋病に罹つた時は其病毒のある間は妻女に近く事をさけ、已むを得ず此禁を犯さうと思ふならば藥店等に販賣して居る大和衣（一名ルーデサック）又は子宮サック等を用ひて其感染を防がねばなりませぬ。女子も亦十分自重して病毒の疑ひある男子と結婚せず、花柳社會に在ては檢黴を嚴重にし、且つ個人の衛生思想を高め、出來るならば前に申しました豫防具を使用する樣嚴命せられたら宜かろうと思ひます。

婦人病者に向つての賣藥など非常に色々ありまして、種々の廣告をして居りますが、此中には隨分如何はしいものが澤山あつて、信用すべきものは誠に尠いのでありますから、之を買つて用ひるには常に注意を要する事で、此の樣な賣藥がある爲めに醫師に托して治療を受ける時を誤り、治る病氣も遂に治し得ないと云ふ樣な事もありますから氣をつけねばなりませぬ。殊に子宮綿などと云ふものを賣つて居ります、之は藥がしんで居るから膣に挿入して置ても害をなさず病氣が治ると思ふて膣の栓塞に用ふる人がありますが、最も初めは藥を含ませてありますけれども日數を經る間には段々藥の氣も薄らぎ、種々の黴菌さへ附着して居る樣になりますから反つて用ひない方が安全で、「君子は危きに近よらず」と云ふ金言を守るが一番得策であります。

總て婦人科的の病は肺や心臓、胃腸などの病と異り、直接眼や指さきを以て診斷を確かめ、且つ洗ふにも藥をつけるのにも皆其腫れたり膿爛たりして居る局處に直接に行ふ事が出來、手術も大部分は下から行はれるし、又腹部を開くにしても當時の醫學は非常に長足の進歩を致して居りますから減多に死ぬるものではありませぬ、故に心配するには及びませぬ。

澤山の人の中には、親にも見せぬ處を診て貰ふ事は恥かしいなどゝ云つて賣藥などにて時を過し、適當の治療を加へない人もありますが、これ程馬鹿氣たものはありませぬ。そして一般の婦人病と云ふものは少しく慢性になると疼痛などが去りますので、まだ腫や膿爛が貼つて居つても苦痛が少なく治つた樣に感じる事が多い爲に治療を中途で止め、或は忘る者が多い樣であります。併し一度侵入した病毒は容易に取り去られるものではありませぬから、何時までも體内の何處かに潜んで居て、やれ月經とか長途の旅行とか、過度の運動とか感冒、氣候の交り目など些細な動機によりまして再び急性發作を起し、大に苦しまねばならぬと云ふ事が起りますから、充分根を斷ち葉を枯して置くと云ふ事を忘れてはなりませぬ。

第十章　主として老年期に發する婦人科病

一、更年期の月經異狀

既に第三章の月經の事を述べた處でお話し致しました樣に、女子が十四五歳になりますると排卵を始め月經が起るものでありますが、此の排卵は通常四十四五歳から五十歳までの間に止み、從つて月經も亦た之に伴つて止むものであります。此の期を更年期と申して居ります。でありますから女が實際に生殖機能を營み得る間、換言すれば子供を産む事の出來る間は月經のある間の凡そ三十年の間であると見てよいの

であります。世には時々六十過ぎてから子が出來たなどと云ふ事を聞きますが頗る怪しい話であります。

若し此の樣な事があつたと致しますならば、それは眞に破格と申さねばなりませぬ。昔から女は二七十四で生殖作用を始め七七四十九で止み、男は二八十六で生殖作用を始め八八六十四で止むと云ひ傳へて居りますが、よく當つて居る事と思ひます。女が四十四五歲位から月經が止む頃になりますると、屢々月經初期の時の樣に下腹か緊滿るとか身體が疲れ易いとか、腰がだるいとか、下肢が牽きつるとか、或は月經が不順になつて有つたり止まつたり、其分量も不正となつて時としては不正の血血を來したり、或は一旦止まつて居つた月經が幾月もたつて再び來潮する樣な事もありますが、大抵の婦人は餘り意に止めずに日を送つて居り、又一旦止まつて居つた月經が再び現れますと、却つて若返つた樣な考へを持つ人もありますが、丁度此の年頃になりますと、唯今申した樣な症狀を以て次に述べます子宮癌と云ふ恐ろしい病が起つて參りまして若返りなどの騷ぎでない樣になりますから餘程注意しなければなりませぬ。

二、子宮癌（しらちながち）

老年期になりまして起る主もな病は子宮癌即ち俗に申します、「しらちながち」でありまして、極めて性の惡い腫瘍が子宮に出來るのであります。

此の病は他の胃癌や舌癌等の樣に多くは四十歲以後に至つて起るものでありますけれども、又其以前に發する事もあり、稀には子宮癌に限りまして二十歲位で起る事もあります。其原因は未だ確實にわかりませぬけれども、機械的の刺戟は確かに其誘引をなすものでありまして、度々子供を產んだもの、或は常に膣內に機械を挿入して居るとか、忍び紙や忍び綿を常に用ひた人などに多いのであります。

其主な徵候は白帶下と出血とでありまして、始めは何となく帶下が多くなり、其帶下は水の樣なもの又は膿の樣でありまして、一種厭な臭氣があり次第に病がおもり其腫物が自然と壞れかける樣になれば出血を起します。此の出血は時としましては非常に澤山でありまして、突然卒倒する事もある位で容易に止るものではありませぬ。そして臭い帶下と出血とが交る〳〵に來まして腫物は次第〳〵に大きくなり、終には子宮のみならず其近傍の臟器にまでひろがり、或は轉移と申しまして遠方の臟器に出店を出し、大小便の通じにも障害を來す樣になり、病が愈々進みますと疼痛を發し食事や睡眠さへも妨げられ、身體は次第に衰弱して惡液質と申しまして皮膚の色は蒼白く黃みを帶び、手足や顏面に浮腫が來る樣になり、發病してから早いものは一年足らずで、遲いものでも二年か三年と經たぬ內に厭でも應でも死なねばならぬ恐ろしい病であります。

此の樣に恐ろしい病も、其初めに適當な手術を施しますれば全く治す事の出來るものでありますが、大抵の婦人病者は既に病が進行してから私共婦人科醫の診察を受けに來るものですから、どんなに手術がしたくても最早する事が出來なくなつて居つたり、或は折角手術しても、何處かに其病根が殘つて居て間もなく再發し遂にそれが爲めに生命をとられる樣になりますのは誠に殘念な次第であります。醫師は其初期にさへ診せてもらひますれば、子宮の一部若しくは全部を切り取つて此の病根を完全に斷つ事が出來ます

處が此病の起る時分が丁度婦人の月經がやがて閉止する時に近づいて居る處から、自然こ血のくるひが來て月經が不順こなり時々不正の出血なごもあるものだ、なごこ考へまして、病の爲に來るものこは思はず輕々しく看過する傾がありますのこ、迷信や賣藥なごに迷はされるのこ、婦人科醫に子宮を診て貰ふ事が恥かしいなごゝ云ふ觀念から段々時を移し知らずの間に病を重らし、最早他目にも病氣であるこ云ふ事が判り、或は痛みが起つて苦しくなつてから醫者の門を叩くものだから、遂に手術も出來ない樣になるのであります。

處で近來X光線やラヂウムやメソトリウムなごが發見せられて、子宮癌を初め其他の惡性腫瘍に用ひ大變に効果があるこ云ふので段々治療に應用されて居ります。又或る一部の人等は、X光線こラヂウムこさへあれば手術すべきものも手術せずに濟み外科醫や婦人科醫の刀は之れ等の病には一向用のないものであるかの樣に申して居ります。併し成る程ラヂウムやX光線やメソトリウム等は癌腫其他の腫瘍組織を破壞し段々小さくさせる事は爭はれない事實ではありますが、此のものは非常に價が高いばかりでなく、之れで治癒したものは全く其病根を破壞せられ五年經つても十年たつても決して再發する虞なく果して病の初期に診斷を確め其病根を全く切除したものゝ樣に全く治す事が出來るかごうかは尙ほ大に今後の研究を要する次第でありますから、決してラヂウムやX光線が發見されたからこ云つて安心して居る譯には參りませぬ。でありますから、成る可く早く診斷をたしかめ、根治手術の出來るものは一時も速かに根治手術を行ひ、尙ほ未だ病根の殘つて居る疑のあるものこか或は既に時が後れて手術の出來ない樣になつたものなごは極力此のラヂウムやメソトリウムの樣な療法を試みるこそ萬全の策ではなからうかこ存じます。

三、乳癌

乳房に發生しまする癌腫の事を乳癌こ申します。之れも亦た通常四十歳以後になりまして起る病でありますが、其れよりも以前に發する事もあります。初め乳房の中に小さな硬結が出來、別に痛みもなければ熱も出ませぬが其硬結は段々時がたつにつれて大きくなります。其硬結は通常非常に硬いものでありますが、又可なり軟かい事もあり、其まゝにして置きまするこ次第に太くなつて仕舞ひには自然こ破壞る樣になります。そして其れ迄に腋窩(わきした)にグリグリが出來ます。是れが即ち其乳癌の出店でありまして淋巴腺に轉移したものであります。斯の樣に轉移しない、グリグリの出來ない前に早く醫師にかゝり乳房を切り除けて貰へば心配はありませぬが、既にグリグリが出來て後に手術を受けますこ後に病根が殘り易く、從つて再發する事が多く、手術の時期を後らすれば段々痛みも起つて來るし、身体も追々衰弱し遂に生命までも失ふ樣になりますから注意しなければなりませぬ。

第十一章　年齢に關係なく起る婦人科病

時期に關係なく年齢を撰ばない婦人科的の病こ申しますれば、子宮や卵巣其他に發生します腫瘍が其主

なるものであります。是れ等は隨分子供の時にも發生致しますし年をこつても起るものであります。

一　い、子宮の腫瘍

子宮に出來る腫瘍は癌腫、肉腫、筋腫等であります。就中子宮癌は大抵中年以後老年になりまして起る病でありますことは、既に申述べた通りであります。肉腫は比較的年の若い人に來る病で其腫瘍が非常に早く太くなり、且つ生命を取る事の早い性の惡い腫瘍であります。そして此の肉腫は子宮だけに出來る譯ではありませず、腟や他の部分からも發生致します。此の腫瘍は比較的軟かでありまして、一旦手術して治癒(なほつ)た樣でも何處かに病根が殘つて居りまして再發する事が多く、且つ處々に轉移して出店を出す事癌腫と異(かは)りませぬ。痛む事もあれば出血する事もあるし、手術を受けて完全に病根が切除せられぬ限りは早晩衰弱して死ななければなりませぬから、婦人の下腹に硬結が出來たとか不正の出血があるとか云ふやうな場合には、一時も早く醫師の診察を受けまして其鑑別を乞ふ事を忘れてはなりませぬ。

子宮筋腫は硬い腫瘍(しぶ)が子宮に出來るのでありまして、之に罹りますと、月經時の出血が非常に多くなり且つ長く續きます。其上月經の時に激しい痛みがあると云ふ事が主もな徴候であります。此腫瘍は月經の度毎に段々太くなり、遂には大人の頭位か尙ほ其れ以上の大さにさへなる事もあります。此の病に罹つたものは姙娠しにくゝ、幸に姙娠しても出産の際非常な子宮出血や子宮破裂などを起して死ぬる樣な事があります。そして腫瘍の出來た始めは下腹の中で動かす事が出來まするが、後には段々腸や腹膜などに癒着して動かなくなります。此の樣になりますと、手術をして取り出す事も大變に困難となります。元來差し當つて命を取る病ではありませぬが、月經の時の苦痛がひどく、貧血が强くなり、且つ次第に太くなつて手術が益々困難となります。又時としては腹の中で柔かく溶けかけ膿を持つ樣な處がありますから早く手術を受ける必要があります。最も年が五十にもなりまして全く月經がなくなりますれば多くは其太るのが止み、甚だしい害をせぬ樣になりますけれども、其れかと申してお腹に腫瘍のある以上は其周圍の臟器は壓迫せられて色々の障害を殘します。それだけならばよろしいが、悲しい事には此の病のある人は五十になつても月經が止まず出血が多いものでありまするから、段々貧血して青瓢蕈の樣になり、是れでは困るから手術を受け樣としますれば、既に年をこり過ぎて身体はひどく衰弱し、腫瘍は腸や腹膜に癒着して手術も何も出來ないと云ふ樣な不幸を見るのであります。

以上の肉腫も筋腫も、X光線やラヂウムで治るもので手術の必要はないなどゝ云つて近來盛んに應用して居る人もありますが、病の初期に診斷を確かめ其病根全部を手術して取り出したと同じ樣に、無害にしつ根をたつ事が出來るかどうか頗る研究を要する事であります。

上に申述べました肉腫や筋腫の外に、子宮ポリープと申しまして小さいのは指尖位から太いのは橙の樣な球形の茄子の樣な莖を持つて居る腫瘍が子宮の內側から子宮口の外に現れる事があります。此の場合には多量の水の樣な帶下が下り且つ不正の出血を來すものでありまして、腟內に指を入れて見ますると其球形の腫瘍を子宮の口の處に觸れる事が出來るものであります。此のものは別に恐れる病ではありませぬが

屢々出血しますので、貧血に陥る恐れがありますから早く醫師にかゝつて切り取つて貰ふに限ります。此手術は別に六ケ敷いものではありませぬから安心してかゝつて宜しいのであります。

其他姙娠した事のある婦人であると、子供の入つて居た袋即ち卵膜の一部分が子宮の中に殘り、其ものが惡性のものにかはり子宮内で非常に發育して大きな腫瘍となる事があります。之を惡性脉絡膜上皮腫と申します。大きいのになると姙娠六七ケ月位の大さになる事もあります。此ものが出來ると癌腫や肉腫の樣に大變な出血を來しまして、患者は段々貧血して衰弱するばかりでなく、癌腫の樣に卵巣やら肺やら腦やら脊髓やら或は他の内臓やらに子宮の中に出來て居ると同じ腫瘍を造りまして、腦膜炎の樣な容体が現はれるやら脊髓炎の樣な容体が現はれるやら或は肺炎の樣な容体が現はれるやらして、發病してから早きは半年遲きも一年半内外で死するものでありまして、癌腫よりも恐ろしき病であります。此腫瘍は殊に流産、流産の中でも葡萄狀鬼胎俗に云ふ葡萄兒と稱するものを流産した後に好んで起るものでありますから流産した時なぞ、最早何も殘つて居らぬ樣に出て、出血もあまりないと云ふ時でも必ず醫者にかゝり、若し卵膜の一部分でも殘つて居る疑のある時分には充分子宮の中を掻いて掃除をして貰ふ必要があります。尙更流産後に不正の出血でもあるとか子宮が段々大きくなるとか云ふ場合は、早く專門の醫師に診て貰ふ必要があります。かゝる恐ろしき病も其初期に診斷を確かめ思ひ切つた手術を受けさへすれば癌腫と同樣に根治する事が出來ます。

ろ、卵巣の腫瘍

卵巣に出來る腫瘍は主に囊腫でありまして、稀には纖維腫と云ふものも出來ます。卵巣囊腫は俗に腸漏と申しまして、卵巣が段々太くなつて袋になり其中に液体が溜るので、大きいのになると姙娠十ケ月の時よりも尙ほ太くなり、自分の手が臍に屆かぬ樣に腹が膨くるゝのもあります。小さいうちは能く腹の中で移動しますが太くなると腸や腹膜と癒着しまして動かなくなり、手術も出來ない樣になります。又囊腫の一種で皮膚樣囊腫と云ふのがあります。是は中に水が溜らずに豆腐の粕見た樣なものが一杯はいつて居て骨やら、齒やら、毛髮やら澤山混じつて居る事があるので、鬼子なぞゝ申して大變人が恐れます。囊腫は普通壓をもつて居りますから、過度の運動などいたしますと腹の中で其壓が捻れる事があります。然るときには突然非常に劇しき痛みを發します。纖維腫と云ふのも囊腫と似たものでありますが、囊腫よりも小さく且つ非常にかたくて囊腫の樣に俄かに大きくなる事の少ないものであります。

卵巣囊腫も纖維腫も内服藥や何かで到底治す事は出來ません。昔から隔、腸漏に醫者いらずと申して、如何なる名醫が貴重の藥を盛つても治す事は出來ません。之を治すは手術の一事あるのみであります。其れも餘り後れると前申した通り腹膜や腸管に癒着して非常に取り惡くなりますから、癒着しない前に手術する事が必要であります。又一側に卵巣囊腫が在つても姙娠します。若し卵巣の腫瘍があるのに姙娠いたしますと、其腫瘍の爲めに子宮が壓迫されて胎兒の發育を妨げ、流産したり早産したりする恐れがありますのみならず、幸に姙娠の終りまでもつても、子宮が横に押しやられる爲めに胎兒の位置が惡く心り難産を致しますから是非手術して置く必要があります。

第十二章　姙娠及び姙娠中の異狀

一、姙娠の經過

性交により女の生殖器内に入りたる男子の精虫即ち子種が女子の卵巣から來た卵に會合したならば之を受胎(はらむ)と云ひ、受胎してから胎兒が子宮内で充分發育して出產する迄の間を姙娠(にんしん)と申します。婦人が受胎しますと排卵機能が止み月經は止まるものであります。さうして此一番終りの月經の初まつた日から胎兒が能く發育して生るゝ迄の日數は平均二百八十日位で、終りの月經の第一日から計算して九ヶ月と七日に相當いたします。此姙娠中の二百八十日を十に割つて其一つ即ち二十八日を姙娠一ヶ月と云ふので、醫師や產婆が云ふ姙娠一ヶ月は普通人の云ふ曆の上の一ヶ月とは異ふのであります。

婦人が姙娠すると月經は止まり精神は過敏となつて、頭痛がしたり齒が痛んだりします。又食物が胃につかへて惡心(むかつき)、嘔氣(むかつき)、流涎(なまつば)等が起り、時には食物を吐き、平素の好物も厭になり、常に慣れないものを好む樣になり、殊に酸味のものを喜び、小便は間近くなり大便は秘結し、乳房は膨れて太くなり、乳頭の周圍は黑褐色にかはり、之を搾ると初乳と云ふて水の樣な乳が出る樣になります。姙娠四ヶ月位から姙娠の月に應じて段々下腹が膨れ出し、胎兒の入つて居る子宮を能く腹の上から觸れる事が出來る樣になります。姙娠五ヶ月から腹の中で胎兒が動き出し、此時分から醫師や產婆は腹の中で胎兒の動くのを知り得るのみならず胎兒の心臟の音を腹の上から聽きわける事が出來ます。胎兒が腹の中で動き出すと子と云ふ觀念が

出來、親子の情愛も起り御父さまに似た賢い子が生るればよいがなぞ云ひつゝ出產の日を待ちぶせる樣になるものです。既に七ヶ月になりますれば腹が膨れて袖でも隱せぬ樣になり、段々肩で呼吸する樣になります。最早十ヶ月の終になりますれば、腹が前の方にズンと飛び出し、臍も膨れ出し、前驅陣痛と申しまして折々子宮が堅くなつたり痛んだり致します。此前驅陣痛は腹の中での出產の準備であります。

二、姙娠中の攝生法

姙娠はもと婦人の主なる役目でありまして、決して病氣ではありませんから、別段異狀のない限りは醫師にかゝつたり、藥を服用したりする必要はないのでありますが、兎角姙娠中は平常と違ひ、種々の刺戟に感じ易く、且つ病に冒され易いから適當の養生法を守ると云ふ事が必要でありまして、新鮮な空氣中で適當の運動をすると云ふ事はよい事であります、併し汽車や汽船や馬車や電車などに長く乘つたり、馬や「ブランコ」に乘つたり舞をまふたりする樣な事は愼まねばなりませぬ。日常慣れて居る仕事は仕ても差支へはありませぬが、强く身体を屈めたり或は伸したり、手を伸して高い處のものを取つたり、長く腰をかけて居つたり、重荷を負ふ事などは止めなければなりませぬ。

又姙娠して居る婦人の精神は極些細な事にも感じ易いものですから、知己親族の不幸や社會の悲慘なる出來事などは成る可く聞かさぬが宜しく、殊に始めて姙娠した人などは出產の時の事を非常に心配するものでありますから、其傍で難產等の話は禁物であります。

飲食物は柔かくて消化し易く滋養に富んだ物なれば何でも差支なく、昔から云ひ傳へて居る樣なバケ獸い禁物を守る必要はありませぬ。唯だ酒、ビール、葡萄酒等の樣な「アルコホル」飲料、鯨、鰯、鰻の樣な脂肪の多い肉類、腹の張り易い野菜類、烏賊、章魚、海鼠、昆布、其他海草の樣な不消化物、胡椒芥子、生姜等の樣な刺戟物などを避け、鯛、比目魚、鮒、鱸等の樣な淡白な魚肉を食し、飲料には清水、牛乳、薄い茶及珈琲、麥湯等が適當であります。

衣服は輕くて暖かく清潔な物を用ひ、寒暖に應じて適度に加減し、胸や腹を緊迫する帶などは之を避け姙娠五ヶ月頃からは腹壁の弛緩を防ぎ、子宮や胎兒の位置を正しく保ち、腹部を暖かにする爲に「フランネル」又は木綿にて造つた巾廣い腹帶を卷き(普通姙娠五ヶ月目の戌の日に着帶式を行ふ)、身体殊に外陰部を清潔にして毎日入浴し、白帶下の多い人は醫師に賴んで洗滌をして貰ひ、兩便の通じをよくし、若し何日も便秘する時は毎朝空腹時に茶碗一盃の冷水(一旦沸騰させて冷したもの)を飲み、或はよく熟した果物又は煮た果物を適度に食し、若し其れでも幾日も便が通じない時は醫師又は産婆に賴んで浣腸して貰はねばなりませぬ。姙娠中に下劑を用ゆる事は宜くありませぬ。之れが爲めに流産する樣な恐れがありますから賣藥などの下劑は決して用ひてはなりませぬ。尙ほ又出産後は子供に乳を哺ませる必要がありますから、乳頭の短かい人又凹んで居る人などは姙娠中から指尖で乳頭を引張り出して長くして置かぬと子供が吸ひつき惡い虞があります。そして姙娠中殊に姙娠七ヶ月後は夫婦は別室に寢る樣にして性交を愼まねばなりませぬ、犬でも猫でも一旦姙娠すれば姙娠中決して交尾すると云ふ事はありません、況して萬物の靈長たる人間にして動物にも劣る樣な行ひがあつてはなりませぬ。而して毎月一二回宛は姙娠に異常が起つて居りはせぬか醫師又は産婆を賴んで診察して貰ふ樣にせねばなりませぬ。

三、姙娠中の異狀

い、姙娠嘔吐(惡阻、つはり)

婦人が姙娠しますと、多くは消化器の異狀を起し、姙娠二ヶ月頃から胸尖がつかへたり嗜好物に變化を來したり惡心、嘔氣を起して屢々食物を吐く樣になります。之を姙娠嘔吐俗に「つはり」と申します。殊に此嘔吐は一種特異のものでありまして、毎朝空腹時に多く起り姙娠四ヶ月頃になると多くは自然に止むものでありますけれども、其激しいものは嘔吐が甚だしく飲食物を見たばかりでも嘔氣を催し、全く食事を攝る事が出來ぬ樣になり、一日十回以上も吐き後には血液さへも吐くことがあつて益々衰弱いたします。其原因は未だ充分明かでありませぬが神經質のもの、平素腸胃の弱いもの、或は子宮や卵巢に病のあるものに多く發し、上流の婦人は下等社會の婦人よりも此病にかゝり易くあります。而して此病にかゝると身体は痩せ衰へ、大便は秘結し、甚だしく口渴を覺ゑ口はカラカラに乾いて口内は惡臭を放ち、時々胃の痛を感じ、目は落ち込み腹は凹んで脊に接着し、甚だしいものになりますと眼の視力さへなくなり、精神に異常を來し遂に死ぬるものであります。之れが爲めに折角喜んで居た姙娠も親の生命には換へられず胎兒を墮胎せしめねばならぬ事が多くあります。ナニつはり位と馬鹿にしてかゝり醫師にも診せず時日を經過

する間に病が重り其れが爲めに死ぬるものが澤山あります。

輕いものは新鮮の空氣中にて適當の運動をなし、兩便の通利をよくし、柔かくて消化し易い食物殊に粥、重湯等を食し、其れも一度に澤山攝らぬ樣にし少量宛度々食し、毎朝嘔吐するものは、毎朝床の中で少量の重湯か牛乳をこり、充分おちついた後に床から起き上り、食後身体を靜かに休ち、胃部に芥子を揑つて貼るこか胃の處を氷で冷すこかすれば自然に治ります、けれども重症のものは醫師の治療を乞はねば治りませぬ。又大便の甚しく秘結するものは醫師又は産婆に浣腸して貰ふが宜しく、其他の事は姙娠中の攝生法の處に述べた事をよく守り養生を怠らぬ樣にせねばなりませぬ。唯だ一言して置たいのは「つはり」は胃の病ではありませぬから、重湯や牛乳は飲んでも直ちに嘔吐するが澤庵漬に茶づけの飯なれば能くおさまるこ云ふ樣な奇異な現象がありますから、病人が好むならば少しは固形物も與へて見る必要があるのであります。

ろ、姙娠中の浮腫（腎臓炎、脚氣、心臓病、貧血症）

姙娠の終りに近づけば膨大した子宮の爲に周圍の臓器や血管が壓迫せられ、自然こ下肢の方の血の通ひが惡くなり、屢々足部下肢の浮腫を起すもので、常に起立して居る事の多い女教師や給仕女や店員なこ殊によく浮腫するものでありますが、之は自然の結果でありまして産後には獨りでに治癒するものであります。然しながら姙娠中には自然的の此足部の浮腫の外に脚氣、腎臓炎、心臓病亜に貧血等の爲に足はもこより顔面及び上肢等にも浮腫を發する事が多いのであります。之等の病の爲に起る浮腫こ自然に起つた足部の浮腫こを鑑別する事は到底素人の出來る事ではありませぬ。それで恐ろしい病の爲に起つた浮腫も自然に來たものこ誤りまして、産さへ仕舞へば治るものゝ樣に考へ醫師にも診せず、遂に重症に陥り醫藥も効を奏せず、あたら生命を捨るものが少くありませぬ。之れ等は大に注意を要する事であり、若し姙娠中に浮腫が起りましたならば直ちに醫師の門を叩き其病原を確かめて貰ふ事を忘れてはなりませぬ。

唯だ素人が心得て居るべき事柄を二三申しますならば、腎臓病で起る浮腫は多く顔面から始まり、小便が澁く且つ其分量が少くなり、脚氣になりまじては足や手の指尖や口唇が痺れ、足の腓腸部が張つて之を揑むこ痛み、動悸が亢奮し足がだらしく歩行が困難こなります。心臓病にて起るものは動悸が亢奮し、胸苦しく、口唇や指の尖の色が惡くて紫色を帶び、手足の尖から浮腫が始まり後に顔面腹部等にまで及び、貧血によるものは顔が蒼ざめ顔面手足に浮腫を起すものであります。之こ異り姙娠中に來る自然の浮腫は唯だ足部及び下肢並に外陰部位までに止るものであります。

姙娠中自然に起る浮腫に對しましては足を永く下げて居ない樣に氣をつけ、久しく立つて居るこか腰をかけて居るこか云ふ事を止め、夜間寢る時には足の尖を高く上げて眠むり、メリヤスの靴足袋又は股引或は脚袢をつけ、時々足の尖から股にかけて撫で足の方の血液を腹の方に向けて送りやる事が必要であります。脚氣は早く手當をしませぬこ衝心の虞がありますから、土地をかへ麥飯、半搗米の御飯を食べ小豆や玄米乳等を用ひ、腎臓炎は姙娠中又は分娩に際して子癇こ申します恐ろしい病を起し、度々癇癇の樣な症

攣を起して僅かの間に生命を取られる虞がありますから、早く醫師の診療を受け其指揮に從ひ、多量の牛乳を飲ませ又鷄卵や其他の蛋白質をさけまして塩分の少いものを攝り、心臓病に對しては身体を安靜にし貧血に對しては充分滋養物を攝るなど、一々醫師から注意さるゝまゝに養生を怠らぬ樣にせねばなりませぬ。

は、姙娠中の出血、流産、早産

婦人が姙娠致しますと白帶下は通常增すものでありますけれども月經は全く止み少しも出血などゞ起すものではありませぬ、若し姙娠中に出血する事がありますならば總て病的のものと見ねばなりませぬ。今其主なものを擧げて見ますと、姙娠五ヶ月以前に起るものは葡萄狀鬼胎俗に葡萄兒と云ひまして一旦姙娠はしましたけれども胎兒は早く死亡して吸收され恰も葡萄の房の樣なものが子宮内を滿したもの、子宮外姙娠と申しまして子宮の外に胎兒が宿つたもの、並に流産等であります。

姙娠五ヶ月後に起るものは流産の外に前置胎盤と申しまして胎盤即ち後産が子宮の口の方に附着して居るもの、後産の姙娠中に剝げたもの、並に早産等であります。而して姙娠中時を選ばず出血するものは前にも述べました子宮癌、子宮内膜炎、子宮口の糜爛、子宮ポリープ並に膣内靜脈瘤と云つて靜脈管の膨脹したものが破れた時等に來るものであります。之等の病は各々特有の徵候を備へ、其治療法も亦た各々異つて居ります。中にも恐ろしいのは子宮外姙娠でありまして、忽ち人の命をとるものでありますから、後に少しく精しくお話する事に致しませう。

前に申し述べました子宮癌等も姙娠中に發しますならば非常に早く增惡すると云ふ事を知つて居らなければなりませぬ。又葡萄狀鬼胎、流産、前置胎盤、膣内靜脈瘤の破裂等は突然多量の出血を來し、急性貧血の爲に手足が冷へ呼吸が苦しくなり、冷汗を流し口唇は紫色となり、脈が惡くなり顏面は蒼白くなつて遂に人事不省に陷り死に至るものでありまして、醫師が來るのも間に合はないと云ふ樣な事も度々ありますから、少しでも姙娠中に出血する樣な事があつたら早速醫師の診療を受ける事が必要であります。萬一突然多量に出血しかけたならば、醫師の來るまで身体と精神を安靜にして下腹を氷で冷やし、氣分が惡ければ少量の葡萄酒、ブランデー等をのみ、心臓部を冷やすか又は芥子泥を貼り、人事不省に陷る事がならば香水、酢の樣な匂の高きものを嗅がせると醒覺いたします。又此の樣な場合に出血するからと云つて決して紙ぎれや消毒してない綿などを膣内に挿入してはなりませぬ。若し流産か早産を起した疑がありますならば醫師と共に産婆を迎へる必要があります。そして流産に際しましては、胎兒や後産が出血と共に全部産出した樣に見ゆても兎角後産の一部が子宮内に殘り、度々多量の出血を來し或は子宮内で腐敗し甚だしく發熱して恐ろしい結果を見る事があり、又往々前に述べました樣に惡性絡結膜上皮腫を生ずる基となりますから特に注意し、假令全部産出したと思ふ時でも必ず一度專門家の診斷を受けねばなりませぬ

元來流産や早産と云ふものは癖になり易いもので、何回も何回も流産する人が少くありませぬ。之を習慣性流産と云ひまして、前に述べました黴毒並に子宮内膜炎等の爲に來るものでありますから充分な養生を怠つてはなりませぬ。そして姙娠七ヶ月以前に出産するものを總て流産と云ふのでありまして、假令子

は生きて生れても成育するものではありませぬ。姙娠八ヶ月から十ヶ月の間に出産するものを早産と申しまして、適當の手當を加へれば育つ事の出來るものでありますが、姙娠の月が若いだけそれだけ身体も虚弱で餘程注意して哺育しなければ育ちにくいものと思はねばなりませぬ。早産は餘程流産と趣が異なり、姙娠月數が進めば進む程自然産に近い經過をとるものでありまして、後に述べまする分娩の條下を御參照なさればよく判ります。唯だ普通の産より胎兒が小いだけ樂な位のもので、普通産婆の取扱に任せて置て差支へのないものであります。

に、子宮外姙娠

婦人の卵巣から出る卵と男子から來る精虫即ち子種とが會合する場所は通常子宮の兩側にあります輸卵管の中でありまして、此所で會合即ち受胎しました卵は子宮の中に來て發育するものであります。處で其受胎しました卵が輸卵管の狹窄とか、捻轉とか或は何か病の爲に子宮の方に來る事を妨げられた時には子宮の外で發育します、之を子宮外姙娠と云ふのであります。若し其卵が輸卵管の中に留まれば輸卵管姙娠一名喇叭管姙娠、卵巣内に留れば卵巣姙娠、腹腔内に留りますれば腹腔姙娠と名けます。

之等間違つた處で發育する卵は子宮内に於きまして發育するものと異なり、卵を包んで居る部分が子宮の樣に堅固でなく多くは姙娠二三ヶ月までの間に破裂して腹の中に出ます、之を子宮外姙娠の破裂と申します。又卵が太くなるにつれ輸卵管の口から腹腔内に辷り出る事があります、之を腹腔内流産と申します

極めて稀には卵が卵巣や輸卵管の中で姙娠の終りまで保たれ胎兒も生きて居る事があります。けれども假令臨月になつても胎兒が産れ出て來る道がありませぬから、醫師が腹を開いて之を取出してやらねば母の命さへも救ふ事が出來ないのであります。

今此の子宮外姙娠が破裂を起しても腹腔内流産を起しても同樣の徵候を現すものでありまして、腹腔内に多量に出血し急性貧血の爲に死に至るものであります。子宮外姙娠でも月經も止り乳房も膨れ乳頭も黑くなり「つはり」も起り姙娠に相違ないと思つて居たのが、突然下腹に激しい痛を覺え脉が惡くなり手足が冷え冷汗を流し顏面其の他の皮膚は蒼白くなり腹は次第に膨滿し遂には氣失ひして死に至るのであります(急性貧血の徵候)。此の際子宮内からも出血を來すものであります。此の破裂や流産を起してから死ぬるまでの時間は色々でありますが、早いものは僅かに四五時間遲いものは一晝夜位でありまして、幸に出血が暫時に止み死を免るゝと云ふ事は甚だ稀れな事で、醫師の手術によつて其出血の源を止めなければ確實に命を取留め安心して居る事は出來ないものであります。

之れが果して子宮外姙娠の破裂であるか或は流産であるかと云ふ診斷は素人は勿論醫師でさへも頗る困難な事でありまして、動もすれば急性腹膜炎だとか盲腸周圍炎だとか心臟麻痺とか、胃腸の痙攣だとか或は子宮周圍炎だとか紛らはしい病と誤診せられ其手當を誤られる事がある位で、後に其れと氣が附いても其時は既に時期を失して手術を行ふ事が出來ず命を棄てさせる事が少くないのであります。でありますから婦人が姙娠しましたならば必らず其初期に異狀の有無を專門の醫師に確かめて貰つて置く必要があります

萬一姙娠中上に述べた樣な症狀を起しましたならば直ちに醫師の來診を乞ふは勿論、醫師の來る迄は極めて身体を安靜に保ち氷で下腹を冷やす事が必要であります。其れを腹が痛いからと云つて腹を揉だり温めたりするのは實に此の病に對して危險千萬な處置でありまして、之が爲に出血は益々强くなり死期を早めるものでありますから注意せねばなりませぬ。

ほ、姙娠中の花柳病

前にも申しました通り花柳病とは黴毒、淋疾、軟性下疳の三つを云ふのでありまして、男女何れか一方に黴毒がある際に姙娠致しますと其病毒は胎兒にまで移り行き、姙娠六七ヶ月までの間に胎兒は大抵死亡し流產するものであります。時としては正規の分娩を遂げる事もありますけれども、生れた子供は遺傳黴毒の黴候を具へて居りまして、生來虛弱であるか或は間もなく死するものが多くあります。能く世間には幾度も幾度も姙娠し其度毎に反復流產する人がありますが、之等は主として黴毒が原因となるものであります。

姙娠中の婦人が淋毒に感染致しますと、胎兒はそれが爲に死ぬと云ふ事はありませぬが淋毒性の膣加答兒や其他淋毒性の疾患を誘發致しまして多量の膿の樣な帶下を漏し、お產の時此の帶下が胎兒の眼に觸れまして恐るべき膿漏眼を起し遂に失明する事があります。

姙娠中に軟性下疳に罹つたとて甚だしい害はありませぬが、分娩の時に其分泌物が胎兒の皮膚に附着致

しますと小兒の薄弱なる皮膚に炎症を起させる恐があります。

故に姙娠前又は姙娠中上記の病に感染し陰部に潰瘍を生じ或は多量の分泌物等がある場合には、豫め醫師の診察を受け病を根治させて置かなければなりませぬ。殊に黴毒は自分一人の病でなくして子々孫々に迄其累を及ぼすものでありますから一層注意しなければなりませぬ。又黴毒を患つた人の妻君が姙娠した時には醫師に血液を檢査して貰ひ黴毒の有無しを確めて置く必要があります。又度々流產した人で血液を檢査して貰つて黴毒の反應が現はれないとて決して安心して居る譯には參りませぬから、驅黴法を受け流產を未發に防ぐ必要があります。

へ、姙娠中の異常帶下

姙娠中は一般に生殖器は充血し且つ柔軟となり自然分泌物を增し帶下は多量となるものでありますが、それは白色の稀薄なものでありまして害をなすものではありませぬ。然しながら姙娠中に陰門炎、膣加答兒、子宮膣部の糜爛、子宮頸管加答兒、殊に淋毒に因る病に罹りますと帶下は黃色又は綠色を帶び膿樣となりて大變其量を增し、之れが爲に外陰部の瘙痒、發赤、糜爛等を來し、又子宮癌を患へて居るものは多量の惡臭のある水樣又は膿樣の帶下を漏らし、屢々血液を混じ、子宮內膜炎を患ふるものも亦多量の白帶下を漏らし、又時としては假羊水と申しまして丁度分娩時の水下り(破水)の樣に突然多量の水樣液を漏らす事があります。

でありますから、姙娠中は常に外陰部を清潔に保ち、且つ帶下の量、色、臭氣其他の性狀に注意し、異常があるこ思はゞ姑息的な自宅療法を施すことなく速かに醫治を乞はねばなりませぬ。

と、姙娠と結核

結核殊に肺結核患者が姙娠致しますこ、病勢は漸次進行して屢々姙娠の中絶を來し、殊に分娩が濟んで後に俄かに病が增惡して死亡する事が多くあります。而して結核患者が產んだ兒は虛弱でありまして結核に罹り易い素質を傳へらるるものであります。それ故結核を患ふるものは成るべく姙娠を避ける方が宜しいのでありますが、已に姙娠しました時には早く醫師の診察を受け、病の經過に由りましては故意に姙娠の中絶(人工流產)を圖る必要がありますから、萬事醫師に相談して其指揮に從ひ、傍ら滋養に富んだ食物を攝り或は適當な强壯劑なごをも用ひて病の進行を豫防しなければなりませぬ。

ち、姙娠中に於ける胎兒の死亡

姙娠中胎兒は卵其ものの異狀、母体の急性又は慢性の傳染病、子宮の疾病、劇烈な精神感動、藥物の亂用其他過度の運動或は外傷なごに由りまして死亡する事があります。若し何かの原因によつて胎兒が死亡する樣な事がありますこ姙娠に由つて起つた處の種々の症狀は速になくなり、子宮の膨大は止み下腹が冷へ時々嘔氣を催したり惡寒がしたり、膣內からは血液こか肉汁の樣な分泌物があります。殊に姙娠五ヶ月後のものに於きましては胎兒が腹の中で其れまで動いて居たのが止み、子宮は太くならぬばかりか反つて小さくなり、一旦膨れてゐた乳房は再び緩くなり、身体を動かすこ其れに連れて腹の中に何か塊が動く樣な感じを起し、膣內から濁つた惡臭のある液をもらすものであります。

姙娠中に胎兒が死亡致しますこ大抵は間もなく流產や早產を來すものでありますが、時こしては死亡した兒が永らく子宮の中に留まり色々の變化を起すことがあります。姙娠の極初めであれば死んだ胎兒は吸收せられて其痕跡すらも見る事の出來ない樣になり、唯だ胎兒の入つて居た袋即ち卵膜だけを產出し、或は卵が變化して一つの血の塊や肉の塊の樣になつて出る事もあり、段々月が重なつてから死亡したものでありますこ、浸軟作用こ云つて兒は大變軟かくなり、皮膚の色が暗褐色こなり、骨こ骨この關節がゆるみ、皮膚が處々剝げて肉が現れて居る樣な事もあります。是等は多く黴毒の爲めに死んだ胎兒に見るものであります。又胎兒は屢々子宮內に於きまして腐敗し非常に大熱を出す事もあり、双胎兒なごで一兒だけ死亡するこ其死んだ胎兒は硬くなり、一方の方に押しつけられて平たく石の樣になつて居る事もあります。故にもし姙娠中前記の症狀が現るゝか、動いて居つた胎兒が動かなくなつたら早く醫師に診せて適當の處置を講じねばなりませぬ。

第十三章　分娩及分娩時に於ける主なる異狀

第一　分娩時の注意

一、準備

妊娠の終りに近づきますと先づ出産に對する準備をして置く必要があります。其準備と致しましては豫て依頼してある産婆が能く注意して呉れますから其指圖に從へば間違はないのでありますが、稀には出産の當時までも産婆を依頼して居らぬ婦人もありますから、今其備へて置かなければならぬ品物の大要を列記致しませう。

一、防水布又は大油紙一枚　御産の時に蒲團を汚さない樣に直接其上に敷く爲め

一、敷布一枚　前記の防水布又は油紙の上を被ふ爲め

一、産用小蒲團數枚　御産の時血液其他の液体を吸收せしめるもので、大形の座蒲團位の大さにし表には晒木綿又は綿紗、裏には油紙を縫ひ合せ中に厚い脱脂綿か普通の綿かを入れて造り、汚れた度に取換へる樣に致します

一、T字帶數枚　半巾の晒木綿で作つた越中褌でありまして、外陰部に壓抵した綿紗や綿花を固定する爲に用ひ、汚れた度に屢々交換致します

一、多量の綿紗及び脱脂綿　外陰部を清拭し或は外陰部に壓抵するのでありまして、少くも各々百目以上用意しなければなりませぬ。

一、兒の湯上げ二枚　大きな西洋手拭が最も宜しい、一つは沐浴の際嬰兒を包み、一つは濡れた嬰兒の身体を拭ふのに用ひます

一、石鹸一個　皮膚を刺戟しないもの

一、後産(胎盤)を入れる器一個

一、小兒沐浴用盥一個、湯婆(ゆたんぽ)個　小兒及母親用

一、小兒の衣服及び襁褓(ひつぎ)數枚　兒の衣類は紐を前で結ぶ樣仕立てるが良しい

一、手洗鉢二個　普通洗面用のもので結構です

前記の内直接又は間接に陰部に觸れるものは消毒をして置かねばなりませぬ。近來分娩具と稱へまして出産の時に要する一切の物品を取り纏め消毒して販賣して居るものがありますから之を購入致しますと誠に便利であります。若し脱脂綿や綿紗を買はないで有り合せの古い布片を用ひ樣と思ひますならば、豫め煮て消毒するか或は數回熱湯を灌いで能く消毒し且つ洗濯した後充分日光に曝し乾かして不潔とならない樣に保存して置かねばなりませぬ。世間の人は葬式には澤山の金をかけ黄金の位牌をも造りますが大事な子供は襤褸(ぼろ)の上で産みます、誠に矛盾した話ではありませぬか。

二、分娩開始時

扨て愈々姙娠も末期となりお產が近くなりますと子宮は收縮致しまして下腹部から腰部並に下肢に放散する疼痛を發します。之を前驅陣痛と申します。此時分になれば度々小便に往きたくなり子宮は下り子宮底は前の方に突出し膣内からは多量の粘液を漏す樣になります。以上の前驅陣痛は甚だ不規則で、長かつたり短かつたり强かつたり弱かつたり致しますが、若し此の陣痛が規則正しく反復し段々間が近くなり且つ疼痛も次第に强まり膣内からの粘液に少量の血液を混じる樣になりますと既にお產が始まつた徵しでありますから、急いで受持ちの產婆に知らせて其來診を乞ひ、傍ら多量の湯を沸し產婆が來診してからの手の消毒や其他に具へて置かねばなりませぬ。

產婆が來まして診察の上確かにお產が始まつて居ると云ふ事ならば直ぐに產室や產床を用意しなければなりませぬ。かく姙娠中の婦人が既にお產を始めましたならば最早や姙婦と云はず產婦と申します。

三、產室及產床

產室には天井の高い空氣の流通のよい暖かい室を撰び、寒い時であるならば暖爐、火鉢等を用ひて室内を暖め、產床は何れの方面からも近寄り易い樣に室の中央に設け、足の方を窓に向け、羽毛蒲團の樣な柔なものは却つて面白くありませぬから普通の蒲團を敷き、枕は通常男子用の坊主枕を用ひ、寢臺ならば其一端に紐又は手拭を結び付け產婦に之を握らせますと便利であります。そして蒲團の上には豫め用意して置いた防水布を敷き冷寒を避ける爲め敷布二て之を被ひ、次で腰部に相當する處に產用蒲團を敷き、腹及び膝の上に懸ける輕い蒲團か又は毛布を用意しなければなりませぬ。產床に就きますにも時のあるものでありますから產婆の命を待ちて產室に入り產床につかなければなりませぬ。

四、產婦及看護者の心得

分娩が始まりますと子宮は不隨意に時を切つて收縮致します。此際下腹から始まつて腰のあたりから下肢に放散する痛みが起ります。之れ即ち陣痛俗に云ふ潮病みであります。此に由て胎兒及び其附屬物は子宮口の方に押しやられ子宮口が開くのでありまして、其陣痛の發作は分娩の進むに從ひ益々頻々となり段々其痛みを增すものであります。故に何分間位を隔てゝ陣痛が起るか且つ其起つた陣痛は何秒或は何分間位續くかと云ふ事は分娩の經過を知るに甚だ必要な事でありますから、能く記憶して置き產婆が來た時に之を報告しなければなりませぬ。

次で分娩が進みますと陰部から水の樣な液を漏出致します。之を破水俗に水下りと申します。通常破水は子宮口が全く開きました時又は將に全く開かんとする時に來るものでありますから破水は胎兒の產出を報ずる徵候となるものであります。

分娩は產床に仰向に臥るか又は横に臥てしなければなりませぬ。稀には座つて產するものもありますけれども、座つて產すると破水と共に臍帶が脫出したり澤山出血したり陰部が裂けたりする恐れがありますから絕對に之を禁じなければなりませぬ。

産婦が産床に就きましたならば努責する時の力を弱めない樣に暖かな粥又は卵湯等をたべさせ、大きな餐に澤山湯を沸かし汰浴い用に具へなければなりませぬ。

多くの産婦殊に初産の婦人は、陣痛が始まりますと間もなく兒が産出するものゝ樣に思ひ、子宮口が未だ充分開かない前から頻りに努責せんとするものでありますが、之は身体を疲勞させるだけでありまして何の効もないものでありますから、産婆から命ぜらるゝまゝに必要の時に至つて始めて力を込め努責する樣にしなければなりませぬ。陣痛が愈々強くなり胎兒の頭が骨盤の中に下りますと肛門及び會陰が膨れて頻りに便意を催すものでありますが、其れは唯心持ちだけでありまして決して便を漏らすものではありませぬから自分で便所に行く樣な事をさせてはなりませぬ。此の樣な場合に則等に參り努責でもすると胎兒が屢々糞臺に産み落し、或は腦貧血を起し或は陰部に大きな裂け傷を作る事があつて、誠に危險でありますから注意しなければなりませぬ。

五、普通分娩　要する時間

普通分娩に要する所の時間は、初めてのお産と度々お産したものとは大變に違ひがあるものでありまして初産では分娩が始まつてから後産の出るまで平均十五時間、經産婦即ち度々分娩した事のある婦人は平均九時間位であります。殊に三十歳以上になつて初めてお産をする婦人は著しく長い時間を要するものであります。通常分娩の經過を三期に分け、分娩が始まつてから子宮口が全く開く迄を開口期又は分娩の第一期と稱へまして其間に最も長い時間を費します。其れから子宮口が全く開いてから兒が産出を終るまでを産出期又は分娩の第二期と稱へ初産の婦人にありましては二時間半、經産婦では一時間半を要し、兒が生れてから後産即ち胎盤の産出するまでを後産期又は分娩の第三期と稱へ初産、經産共に三十分間位を要するものであります。

第二　分娩時に於ける主なる異狀

一、分娩の遲延

お産は假令長い時間かゝつても破水前即ち水下り前でありますれば母も兒も共に危害を被る事はないのでありますが、子宮口は完全に開き既に破水して胎兒の頭部又は臀部が深く骨盤の中に進入してから長い時間かゝりますと、獨り胎兒の命が危いだけでなく、母体も亦兒の頭の爲めに子宮口緣や膣壁が壓迫され之れが爲めに其部の血液の循環が杜絶して遂には膀胱又は腸と膣との間に瘻孔を作り不隨意に大小便を漏す樣になります。或は又長い時間を費す間に黴菌が侵入致しまして發熱する場合もあり、或は後産の出が遲れます爲め多量の出血を來し急性貧血を起す事もあります。でありますからお産が長引く場合には産婆の勸めに從ひ速に産科醫を招かなければなりませぬ。

此の分娩の遲延する原因を擧げて見ますれば、胎兒の通過すべき道即ち骨盤の狹いもの、子宮口や膣が狹くて開き惡いもの、胎兒が非常に大きな時、胎兒の位置並に向きが不適當な場合等種々であります。普

通胎兒は子宮内では頭を下に背を母の左側又は右側に向け、臀部を母の胸尖に向け、分娩に際しては胎兒の後頭部から產出するものでありますけれども、時としては顏面、前頭、前額等から產出を始め、或は足の方から產まるる事があるのみならず、時としては胎兒は子宮の中に横に位し先づ手を突き出すことさへあります。之を横位と申します。横位は必ず醫師の手に由りまして縱に回轉させねば分娩する事の出來ないものであります。此の樣な胎兒の位置並に向きの異つて居るもの等は學識經驗のある醫師又は產婆でなければ診斷し難いものでありますから、分娩に際しては信賴するに足る產婆を選び萬事其指揮に從はなければなりませぬ。其他分娩は陣痛の弱い爲に遲延する事も多くあります。

二、陣痛微弱

陣痛微弱とは潮病みの弱いものを云ふのでありまして分娩の遲延を來すものであります。此の陣痛微弱の原因も亦種々ありますが、就中大小便の排泄が不充分な爲めに來る事が多くありますから、私共が產婆を教育するに當りまして、產家に到り診斷を終つたならば先づ浣腸を施し尿を取り、卽產を終るまで膀胱の中に尿が溜つたり大便が蓄積したりする樣な事のない樣に注意して居ります。併し「カテーテル」と云ふ管で尿をとることは產婦に不快を感ぜさせます爲め多くの婦人は之を厭ひ、大便は今朝通じました小便は先程出ました等と云つて產婆に手を下させず、之が爲めに陣痛の微弱を招き分娩を遲延せしめるものが少くありませぬ。それ故分娩を早く了らせ度いと思ふならば、產婆の勸めを聞くまでもなく自ら進んで浣腸を詳ひ排尿をしなければなりませぬ。殊に衰弱な陣痛は子宮の收縮を惡くし後產の產出が後れ產後になりまして多量の出血を來す原因となりますから注意しなければなりませぬ。

三、子癇

分娩の前又は分娩中又時としては產後突然に癲癇發作の樣に全身の痙攣を起し、人事不省に陷り甚だしき危險に陷る事があります。殊に其痙攣發作が頻々として來り正氣に歸らず死を來すものが多いのであります。これは子癇と申す病でありまして、妊娠中に浮腫妹に腎臟炎があつたものに來ます。故に浮腫のある妊婦は豫め醫師の治療を受けなければならぬと云ふ事は既に述べた通りであります。此ものゝ分娩に際しては一層の注意を拂ひ、若し痙攣を發する樣な事あらば直ちに醫師の來診を乞ひ、醫師の來着する迄は病人の周圍を靜にして室内を暗くし雷燈に被ひをなし刺戟をさけ、痙攣發作中は決して狼狽する事なく器具を取り片附けて手足を怪我させぬ樣にし、且つ木片に布片を卷き齒の間に挿みて舌を咬まない樣に心懸けねばなりませぬ。强て病人を押へつけ痙攣を止め樣としましても止め得るものではありませぬ。此病は幸に治つても後で發狂したり或は慢性腎臟炎が貽つたりして困るものでありますから、早く產を終り充分に治療を受ける事が必要であります。

第三　分娩直後に於ける異狀

一、後出血

分娩が終ると直ぐに起り易い異狀は後出血と稱する出血でありまして、主として子宮の收縮の惡いものに來り、分娩に長い時間を費したもの程此後出血を來すことが多いものであります。時としては子宮の收縮が良好であるにも拘らず出血を見ることもあります。これは子宮口、膣、外陰部等の裂け傷から來るものと看做すべきであります。何れに致しましても、萬一多量の出血を來します場合には身体を安靜に保ち枕を取り除け頭を低くし腹帶を堅く緊め、腹壁の上から子宮を強く摩擦して收縮を促がし、下腹を氷でひやし傍ら醫師を迎へて治療を乞はねばなりませぬ。其間に顏色が蒼白くなり脈が微細となり胸が苦しくなり惡心を催ふし嘔氣を發し、眩暈がする等急性貧血の徵候が現れます樣ならば、後で述べまする腦貧血と同じ處置を施せばよいのであります。

二、軟部の裂傷

分娩に際しましては兒の頭が狹い子宮口や陰門を通過するのでありますから子宮口や外陰部に多少の傷が出來るのは免がれ難い事であります。殊に始めて分娩する婦人などでは殆んど無傷に分娩を終ると云ふ事は難かしいのであります。然し普通此の裂傷は小さなものでありまして產後產婆の處置に由り數日の後に治癒して仕舞ふものでありますが、時としては子宮口、膣、外陰部殊に會陰卽ち肛門と陰門との間に大きな裂け傷を作り、之が爲に子宮は固く收縮しましても此の創面から多量の出血のある事があります。若し此裂け傷を放て置きますと遂には膿して熱を出し、或は大きな瘢痕を殘し、陰門が廣くなり爲に子宮が下垂し或は脫出し、膣壁が外に翻轉して出たり等して絕えず多量の白帶下が漏し、子宮內膜炎、膣加答兒等を惹き起し種々の障害を招きますから、創面は必らず醫師の來診を乞ひ縫合して貰ふか或は適當の處置を施して置はなければなりませぬ。然るに醫師を招くにも往々お產後二日も三日も經つてから依賴する樣な人がありますが、斯くては創面は既に黴菌の爲に冒されて縫合術を施しましても癒着しないばかりか却つて化膿し易いものであります。故に若し裂け傷を來しましたならば直ぐに醫師を迎へることを忘れてはなりませぬ。

三、腦貧血

其他產後直ぐに來る危險症は腦貧血でありまして、多くは分娩後の出血の爲に來るものであります。併し多量に出血しない場合でも本症を發する事が往々あります。之れは產後に起きて座ることか或は俄かに頭部を上げることかした時などに來るものでありまして、頭の方に血液の循環が少い爲に起るものであります然るを古來產後は枕を高くしなければ血が頭に上るなどと云ひまして殊更高枕を造り、或は產後產床の上に座つて養生するものがありますが誠に誤つた事であります。分娩の際は俄かに多量の血液を失ひますから腦內の血液は不足し、從つて腦貧血を起し眩暈を催し、顏色は蒼白くなり、冷汗が流し四肢厥冷し胸が惡くなり嘔氣を催ふし或は嘔吐し、耳が鳴り頭痛を訴へ、或は頻りに欠伸をなし、脈搏は微弱となり遂に人事不省に陷り時々痙攣を起して死に至る事があります。故に產後は必らず枕を低くし靜かに臥せる樣に

して決して漫りに起してはなりませぬ。若し前記の症狀を來しましたならば急性貧血に於ける場合と同樣に頭部を低くし、身体を安靜に保ち、少量の葡萄酒か又は「ブランデー」を與へ、香水又は酢の樣な香氣の高いものを嗅がしめ、手足を温めるか或は摩擦し、心臟部に氷嚢を貼し或は心臟部に芥子を揑つて貼り、傍ら醫師を招かねばなりませぬ。頭痛がするからと云つて漫りに頭を冷やしたり或は頭に鉢巻をする樣な事をしますと却つて病勢を惡くするものでありますから愼まねばなりませぬ。

四、後陣痛

度々分娩した婦人又は急速にお産が濟んだ婦人、或は子宮内に凝血や胎盤片等の遺殘して居るものなどは、産後三四日の間烈しい刻期的の下腹痛を訴へるものであります。之を後陣痛、俗に後腹(あとばら)と申します。凝血又は胎盤の遺殘さへありませぬならば此後陣痛があります爲に却つて子宮は能く收縮し、出血を減じ、子宮が早く復舊しますから心配するに及ばないものであります。故に出血もなく熱もなければ身体を安靜に保ち、下腹に氷嚢を貼し、自然の治療を待てばよいのであります。然し發熱するか出血があるとか云ふ場合には決して等閑に附することなく醫師に托さねばなりませぬ。凝血、胎盤片等の遺殘したものに在りましては後陣痛と共に多量の出血があるものでありますから注意しなければなりませぬ。

第十四章　産褥の經過、褥婦の攝生法並に産褥中の異狀

第一　産褥の經過

姙娠分娩の爲に生じた變化の一部は長く其痕跡を留めますけれども、大部分は産後七週間位で殆んど舊形に復します。此の期間を産褥と云ひ、其間の婦人を産褥婦と申します。此の期間に於て生殖器は一般に日を追ふて復舊致しますけれども、獨り乳房だけは却つて著しく緊滿し多量の乳汁を分泌して兒を養ふ事が出來るものであります。

今分娩を終りました婦人は先づ大變に勞れを感じ、時としましては輕い惡寒を催ふし、暫時にして暖かくなり次で少しく汗をかき、陰部に焦く樣な鈍き痛みを覺ゆるだけでありまして、甚だしい苦痛なく、間もなく眠りを催ふし、睡眠中に身体は暖かくなり、汗をかき、醒覺して後は疲勞も去り爽快を覺ゆるものであります。分娩の直ぐ後は脉も數が澤山でありますが五六時間たつと緩かになり、体温は一時昇る事もありますけれども攝氏の三十八度を超ゆる事はありませぬ。皮膚は常に濕潤して發汗し易く、食慾は初め一二三日間は減じますが次で常に復し、後には子持二人前等と申して却つて亢進するものであります。便通は身体を安靜にして居るのと腹壁が弛緩して力が入れられぬ爲めに一週間位は秘結致しますが、後には常に復します。毛髮は産後多少脫落し、精神は一般に少しく過敏となり、皮膚は少しく血色を失ひます。

分娩直後子宮は硬く收縮して球形をなし、弛緩した腹壁の上から能く之を觸れる事が出來、子宮底は臍の少しく下の方にありますけれども間もなく臍の高さに達し、其れから段々日を追ふて小さくなり、産後

五日目には子宮底は臍と耻骨との中央に達し、十日目になりますと僅かに其上端を腹壁上から觸れる事が出來るだけになります。二週間を經ますと最早や子宮を腹壁上から觸れる事が出來なくなります。而して産後は多量に一種の臭氣ある液体を陰部から漏らすものでありまして之を惡露と申します。之れは子宮内の創面から分泌する創液や血液や粘液等の混合したものであつて、産褥の初め二三日の間は殆んど純粹の血液で少し粘稠でありますけれども、三四日後になりますと稀薄となり淡紅色を呈し、七八日經ちますと水の樣になり、十日の後になりますと膿の樣になり且つ其分量も大變減少し、子宮内の創面の治癒するまで續くもので大約三週間の後に止むものであります。殊に産んだ兒に乳を與ふる婦人は子宮の收縮がよく從つて惡露も早く減ずるものであります。惡露の分量は人々に由りまして一樣でなく、又同一の人でありましても産褥の時期に由つてちがひます。惡露は一種特異の臭氣はありますけれども決して惡い臭氣又は腐敗臭を發するものではありませぬ。若し厭らしい腐敗臭があるならば其れは病的です。

乳房は姙娠中から能く發育しますが殊に分娩後三四日經ちますと俄かに緊滿し多量の乳汁を分泌するものでありまして、通常其前徵として乳房は大變に緊滿し、知覺過敏となり、屢々牽く樣な刺す樣な疼痛があり、甚だしいものは手の上げ下ろしさへ不自由を來す事もあります。然し一旦乳汁の分泌が始まりますれば疼痛は去り、且つ乳を哺ませる事が多くなるに從ひ益々其分泌は盛んになります。但しお産後初めに分泌する乳汁は稀薄でありまして、鹽分に富み糖分に乏しく、之を生れた兒即ち新生兒に與へますと大便の通利をよくするものであります。之を初乳と申します。然しながら三四日を經ますると初乳は眞の乳汁と代り、分泌は多量となり、黄味を帶びた白色の濃厚な液となり、乳房を搾りますと線狀をなして噴出する樣になり、授乳する婦人でありますと産後九乃至十ケ月間分泌續き次で漸次に減少するものでありますが時としましては二三年も續くものもあります。多くの婦人は授乳期間には排卵作用なく月經も止まつて居るものでありますが而して十ケ月位の後兒に乳を哺ませる事を止むる時は乳房は數日の後弛緩縮小し、分泌は減り終に全く止み、再び月經が來潮します。之に反して乳を授けない婦人にありましては乳汁の分泌は十數日で止み、産後六七週にて月經の來潮を見ます。自分で兒に乳を與へない婦人には次の小供が早くやどると云ふ事は一般に人の知つて居る處であります。併し自から乳を哺ませて居る婦人でも産後二ケ月間位から排卵作用が始まり月經が始まるものもあります。斯樣の人に次ぎの姙娠の早いのがあります。

乳汁の分泌は精神の感動、身体の過勞等に由つて減少致します。其他飲食物の多少、榮養の良否等に由つても其分量に增減があります。黴毒、結核其他の傳染病毒は乳汁中に移り行きて兒を害し、多數の藥品も亦母に與ふれば乳汁中に現はれるものでありまして、母体に下劑を與へると兒も亦た下痢を催す場合が多くあります事はよく人の知る處であります。

第二　産褥中の攝生

産褥中の主なる攝生法は姙娠及び分娩に由つて起りました全身、並に生殖器の變化の復舊を促がす事であります。若し此等の變化が速かに舊に復しませぬならば、或は出血したり或は發熱したり、其他種々の障害を招くものであります。故に産後一週間位は靜かに仰むきに臥し、大小便なども寢床の中で挿し込み

便器にて受け、一週間後に至り熱も出ずず出血もなければ始めて床の上に座り、無事二週間を經過したならば少しづゝ室内を歩行し、三週間後になりまして始めて室外に出る事が出來ます。産褥の初めは側臥さへ輕々しくしてはなりませぬ。階段の昇り降り等は三十日後にするが安全です。汽車や汽船等にての旅行は四五十日を經なければよくありませぬ。我國に於きましては古來兎角早く床を離れる弊害があります。之が爲に子宮の位置に異狀を來し、或は日數を經て後再び出血する樣な事があり、或は發熱する等の危害を招くことが尠くありませぬ。精神の安靜も亦た必要でありますからして、臥床にある間は他人の來訪を避け、喜怒哀樂共に感情を刺戟する事のない樣注意しなければなりませぬ。

産褥の初め一週間は毎日一回乃至二回宛外陰部を五十倍の石炭酸水か又は百倍の「リゾール」水で綺麗に拭ふて消毒し、創面がありますならば沃度ホルム末を撒布し消毒した綿紗數枚又は澤山綿花を壓抵して丁字帶を施します。此壓抵布は汚れましたら度々之を交換しなければなりませぬ。普通の場合には膣内を洗滌する必要はありませぬ。而して外陰部に壓抵しました綿紗又は綿花を交換する時には惡露の分量、色、臭氣等に氣を附け、出血が長く續くか惡臭を放つ樣な事があらば直ちに醫師の來診を乞はなければなりませぬ。入浴や腰湯は産後惡露が止み且つ外陰部の創面が全く治癒した後にすべきものでありまして、大阪地方の習慣である「六日だれ」と云つて産後六日目に腰湯をなす樣な事は全く之を廢さなければなりませぬ。若し腰のあたりや足などが血液其他で汚れて氣持ちが惡るければ前に述べました消毒藥に浸した布片で綺麗に拭ふ樣にすればよい筈であります。

欠

等で造つた巾廣の腹帶が最も適當なものであります。

母自から兒に乳を與へると云ふ事は獨り小兒の健康上だけでなく母体の産褥の經過を良好にする益があります。即ち授乳しますれば食慾が亢進し、子宮の收縮を促がし、惡露が速かに閉止致します。故に健康な婦人でありますれば、産後六時間から八時間位を經ちまして疲勞がなくなり、兒は俄に泣く樣になりましたら始めて乳を授けなければなりませぬ。尙ほ詳細な事柄は育兒法の處で申しませう。

第三　産褥中に來る主なる異狀

一、産褥中の發熱

産後に於きまして最も多く婦人の生命を危險に陷らせますものは、發熱殊に産褥熱であります。正規であつて何等の障害もなく經過した分娩でありましても生殖器には數多の新しい創面を造り、殊に胎盤、卵膜の剝離した處は廣い創面をなすのみならず、妊娠並に分娩、産褥中に於ける生殖器は一般に血液に富みますれば忽ち繁殖し、初めは創傷の局部に炎症を起しますが間もなく深部に進み、子宮内膜、實質、外膜等が腫れて化膿を始め、其炎症は暫くの間に周圍に蔓延し、加ふるに此處に生じた黴菌の毒素は忽ち血液の中に入りまして危險な全身症狀を惹き起します。其れ故に分娩、産褥中外陰部の消毒が不完全であるか外陰部に不潔な手指を觸れるか、外陰部に壓抵します綿紗や綿花などの消毒が惡いか、産婆や醫師の手指や器械等の消毒が不完全なるか、分娩が長い時間かゝり病原菌の侵入する機會を造るか、産後の攝生法がよくないとか或は子宮内に凝血や胎盤、卵膜片などが遺殘し腐敗する樣な事があるとかすれば、忽ち産褥熱を發するのであります。之を以て見ますれば、彼の「六日だれ」の樣な創傷が未だ癒ゐない以前に腰湯をすると云ふ樣な事や、産後時日を經過しないのに床を離れて便所に行き、又消毒しない不潔の布片や綿等を陰部に觸れると云ふ事等は誠に危險千萬な事であります。

今産褥熱の主な徵候を擧げて見ますれば、分娩後第一日で既に發熱するものもありますが多くは分娩後三四日後になりまして突然寒氣を催ふし、熱を發し或は慄ひが來て熱を出し、全身倦るく口渴、頭痛を起します。熱は三十九度以上に昇り脈搏の數が非常に多くなり、食事は進まず惡露は大抵惡い臭氣を放ちます。そして熱は高く稽留して下らぬものもあり、或は熱が出る度に惡寒と戰慄を伴ひ、高い熱を出し數時間の後に發汗して下り、又惡寒と戰慄を起しては高い熱が出ると云ふ風に間歇性に發熱するものもありますが、輕いものは醫師の適當な治療に由りまして數日乃至十數日で熱が下り治癒しますけれども、重症になりますと熱は下らず腹膜炎の症狀を起し、腹は緊滿し疼痛を訴へ、甚だしいものは腦に異狀を起し精神は朦朧となり、遂に心臟麻痺に陷りまして死亡し、或は身体の諸部に膿を持つた出來ものを造り衰弱甚だしく遂に死亡するものもあります。今申します樣に眞の産褥熱と云ふものは中々六ヶ敷、多くは死亡するものでありまして助かるものは誠に少なく、治癒するにも甚だ長い時日を要するものであります。

産褥に於きまして高い熱を發し産褥熱と紛らはしいものは腎盂炎と云ふ病でありまして、是れ又屢々婦

人を死に至らしめるものであります。此病は腎臓から輸尿管に移り行く部分に黴菌が侵入して發する病でありまして、産褥熱であるか腎盂炎であるかは熟練した醫師でないと鑑別の困難なものが多いのであります。其他産褥に於きましても肺炎や肋膜炎に罹り或は感冒に冒される事があります。結核の如きも産褥に於て俄かに悪くなり高い熱を發し死に至るものが決して少なくありません。

産褥熱は今述べました樣に極めて危險の病でありまして、醫師や産婆は常に消毒を守り其豫防に腐心致しますけれども、肝腎の家庭に於て醫師や産婆の命令を用ひず消毒を無視される樣な事があれば、豫防法も何等の詮なく自ら求めて死を招くに至るのであります。故に常に醫師や産婆の命令を守り、攝生法を怠らない樣に心懸け、消毒した材料を用ひ、若し熱が出るか恶露（おりもの）に異狀を認めたならば早く醫師の診療を受け、傍ら絶對に安靜を守り下腹を氷で冷やし、流動性の食餌を攝り、熱の高いものは頭部に氷嚢をつけるなど一々醫師の差圖に從ひ看護に怠さなければなりませぬ。

二、兩便の障害

前にも述べました樣に、産褥中の兩便の排泄は生殖器の復舊に大なる關係をもつて居りますから、産後五日も經つて未だ便通がないと云ふ樣な事があれば産婆に告げて浣腸させ、下痢を催しました時は腹部を暖かに保ち、流動粘滑性の食餌を攝らせ、醫師の診察を乞ふて投藥を受けねばなりませぬ。尿も自分でする事が出來ない人は産婆に話して「カテーテル」で尿をとつて貰はなければなりませぬ。時としては度々小便に往きたくなり排尿する時に疼痛を訴へるものがあります、之は多くは出産當時に尿道を傷けたか、或は壓迫の爲めに腟れを起したか、或は消毒の不完全な「カテーテル」を挿入したか、或は未熟な人が「カテーテル」を挿入したかに由つて尿道を傷け黴菌侵入の機會を造つたか、或はさうでなくとも産褥に於きましては能く尿道炎や膀胱加答兒、甚だしいものは腎盂炎を起すものでありますから、前記の症狀がありますならば直ぐ樣醫師の診察を乞はなければなりませぬ。そして生姜、胡椒、芥子、酒類などの刺戟物を避け、多量の牛乳を飲んで尿を稀薄（うすく）にする事が肝要であります。如何に消毒を嚴重にしましても度々「カテーテル」を挿入致しますと膀胱加答兒を起しますから、産後は出來る事ならば「カテーテル」に由らず尿を自分で排泄する事に勉めなければなりませぬ。産後尿を出したくも自分で排泄する事の出來ないものが澤山ありますが、之は臥したまゝ排尿する事に慣れて居ないのと、腹壁が弛緩した爲めに充分腹に力を入れて氣張る事が出來ない爲に來る事が多いのでありますから、伏して排尿を試みますと「カテーテル」等の要なくして濟せる事が出來るものです。其他時としては不隨意に知らず知らず尿を漏すものがあります、之は主として分娩に長い時間を費し其間に於ける兒頭の壓迫に由りまして膀胱と膣との血液循環が止まり癒（ゆ）孔を造つた爲に來る所謂膀胱膣瘻でありますから、早速醫師の診察を受け適當な時に手術を受けなければなりませぬ。

三、乳房の疾患

管孔や其周圍の皮膚は特に薄弱なものでありますから、乳を與ふる時分に屢々表皮が剝げ脱ち或は皺裂を生ずるものであります。此のものは乳を哺ませる時又は衣服の摩擦によりまして疼痛を感じ且つ出血する事もあります。或は小兒が吸ひます爲めに水胞が出來其れが後ちに自然に潰れて糜爛面を造る事があります。

故に皮膚の弱いものは屢々酒精で乳頭や其周圍を拭ひ皮膚を強くして置く必要があります。已に皺裂や糜爛を生じ哺乳時に疼痛を感じますものは乳頭に護謨製の乳頭帽と云ふものを被らせて哺乳させ、哺乳の前後には五十倍の硼酸水で創面を拭ひ、尙ほ治らない時は醫治を乞はねばなりませぬ。乳頭及び其周圍の皮膚の皺裂又は糜爛面から黴菌が侵入するか、或は乳頭を不潔にし或は乳の出て來る管が閉鎖し乳腺の中に乳が蓄積しました際黴菌が侵入致しますと、忽ち乳房は腫れ痛み熱を發し遂に化膿する事があります。之を乳腺炎と申します。乳腺炎は乳腺体を破壞致しますから、治癒して後ちに乳汁の分泌がとまる事があります。それ故に常に乳頭を清潔にし、哺乳の前後は乳頭及び其周圍の皮膚を綺麗に拭ひ、皺裂や表皮剝脱や糜爛等がありますならば速かに之を治さなければなりませぬ。若し乳房が緊脹し疼痛を感じますならば速かに五十倍の硼酸水の濕布を施し、醫師の診察を受けなければなりませぬ。

乳汁は乳房に格別の變化がなくて其分泌が減少するものがあります。又之に反して分泌が甚だ多く常に點滴狀に自然に漏出するものもあります。

殊に授乳をやめました後にも多量の乳汁が漏出して衣服を汚すものもあります。乳汁の少ないものは滋養攝生に勉め、分泌の過多なものは婦人の身体を衰弱させ慢性貧血に陷らせますから常に滋養物を攝取し適當の運動を營み便通を整へ、傍ら醫治を乞ふ方がよくあります。乳汁の少ないものには今迄適當の藥がありませぬでしたが、萃者は乳汁分泌に對する研究をとげ、胎盤の中から乳汁の分泌を促かす藥を取り出す事に成効いたしました。此ものは「ラクチフエリン」と申して目下三共株式會社から賣り出して居ります乳の少ない人は醫師に賴んで此「ラクチフエリン」を注射したり服用したりして御覽になる事を御勸めいたします。

第十五章　育　兒　法

第一　成熟兒の徵候及其發育狀態

能く成熟して生れました健康な新生兒は直ぐに高い聲を出して啼き、活潑に手足を動かし、且つ元氣のよい呼吸を營むものでありまして、身の丈け凡そ曲尺の一尺五六寸(約四十八乃至五十仙迷)、体重七百五十匁乃至八百匁(二千八百瓦乃至三千瓦)、全身能く肥り、皮膚は淡紅色を呈し、毛髮は黑く密生し其長さ約三仙迷、爪は可なり硬く指尖を越ゑ、男の子にありましては睪丸は陰囊内に降り、女の兒でありますると大陰唇が能く發育して小陰唇を掩ひ、出産後多くは間もなく大小便を漏し、頭の骨も可なり能く癒合し唯だ大顚門(踊りこ)の處に菱形の間隙があるだけであります、頭の周圍は凡そ一尺(三十三仙迷)、肩胛の廣さ十一仙迷、腰部の廣さ約九仙迷あり、皮膚の産毛は殆んどなくなり唯だ背と肩胛の處に少しく殘つて

居るだけであります。体温は三十六度乃至三十七度でありまして大人よりは少しく高い体温を示します。脈は一分間百三十乃至百四十位、呼吸は一分間三十乃至四十位であつて、産出後三四日の間は胎糞（かにばゞ）と云ひまする暗綠色粘稠の便を漏らし、後には黄色の軟便を排出する樣になります。尿は出産後一日位は少しく濁つて居りますが後には透明となり、臍帶の殘部は出産後日を經るに從がひ乾燥し、早いものは四五日遲いものは七八日の後に自然と取れまして二週間迄の間に少しの創面も見ない樣に治り、四き臍窩を造ります。出産の際頭部の骨と骨との緣は互に重なり合ひ、お産に長い時間を要しましたものは産瘤と云ふ瘤が出來て居ります、之れも數日の後に自然に治癒し、頭は球形となり誠に可愛らしい顏貌となります、兒が生れて四五日の間は大小便の通利、哺乳の不充分、身体の冷却等の爲めに体重が減じ、八日乃至十日位を經ますと出産當時の体重に復し、それからは日を追ふて体重を增し、身体は肥滿し、爾後四ケ月の終りになりますれば生れた當時の殆んど倍量となり、一年の終りには生れた時の三倍の体重を示す樣になり身の丈けも二尺四五寸に達します。兒が生れて七八ケ月を經過致しますと乳齒の發生を初め、先づ下顎の前齒（門齒）から上顎の前齒（門齒）次で小臼齒と云ふ順序に次ぎ次ぎに齒牙を發生し、二年の終りには二十本の全部の乳齒が揃ひ、七八歲の頃から其乳齒は脫落して順次三十二枚の永久齒と代るものであります、其代る順序も初め發生した齒牙からするものであります。而して出産當時尙ほ未だ閉隙を存して居りました頭蓋の顚門も一乃至一年半の間には全く閉塞する樣になります。

第二　兒の榮養及看護法

一、榮養法の種類並に其優劣

兒を養ひますのに天然の榮養法、人工榮養法、混合榮養法の三種があります。天然の榮養法とは人の乳即ち母乳或は乳母によつて小兒を榮養する事を云ひ、人工榮養法とは牛乳、「コンデンスミルク」、山羊の乳並に乳粉等の樣な人工榮養品で榮養するものを云ふのであります。混合榮養法と申しますのは母乳の不足する場合などに人乳と人工榮養品とを併用して兒を榮養する事を申します。

三種の内天然榮養は獸類の乳又は人工榮養品にて代用する事の出來ない特殊の乳兒榮養品でありまして母自から兒に哺乳させると云ふ事は小兒の榮養だけでなく母体の生殖器の復舊を助け、悪露が早く止まり肥立ちがよく健康を助け、且つ母乳は兒が成育するに從ひ之に適切な濃さに成るものでありますから最も優秀な榮養法であります。然るを若い奥さん達が、自分で兒に乳を與へると外出の邪魔になるとか交際社會に立たれぬとか容貌が悪くなるとか云ふて自分で乳を與へず、下女まかせにされるのは氣が知れませぬ。斯樣の人は子が可愛くない人でせう。

故に特別に授乳を厭さなければならない理由がないならば、母は必ず自から兒に哺乳させなければなりませぬ。之に次ぐものは混合榮養法であります。母乳の不充分な時に人工榮養品で之を補ふのでありまして天然榮養には及びませぬけれども尙ほ純粹の人工榮養法に優ること數等であります。人工榮養法は爲止

むを得ない場合にのみ應用すべきものでありまして、兒は之れが爲に榮養障害を起し或は消化不良の爲に死亡するものが澤山あります。

我大阪は世界中に於て乳兒の死亡率の最も高い處でありまして、大正六年の統計を見まするに千人の生産に對し二百五十四人餘の死亡を見、神戸市は二百十五人、京都市は二百二人餘の死亡を見て居ります、歐米各國の都市に於きましては未だ嘗て生産千人中二百以上の死亡を見た所はありませぬ。此乳兒死亡の最も主なる原因は榮養障害であります。兒の死亡率の多い大阪に居住するものは特に一層注意して兒を養育しなければならぬと思ひます。何程子寶を得ても皆死んで仕舞つたのでは骨折り損の草疲れまうけで何にもなりませぬ。

二、産後新生兒の取扱法並に授乳の時期

兒が生れて産婆が沐浴を濟し臍帶斷端の處置を終りましたならば、其時候に應じて暖かで寛かな輕い衣物を着せ、頭には綿又は眞綿を被らせ、直接風に當らない樣にし、寒冷の時候には身体を冷やさない爲め湯婆を入れ、暖かな病室の中に仰臥させて置かねばなりませぬ。かくしますれば兒は通常暫く睡眠するものであります。

お産後五六時間乃至七八時間を經ますと兒は眼を醒まし乳を求めて泣くものであります。此時は最早や母も産後安心して睡眠し漸く疲も安まつた後でありますから、此時初めて其母の乳を與へるのであります。

古來我國には産後間もなく生兒に乳を與へず胎毒下しと稱して五香湯、「まくり」等の下劑を與へて早く胎糞を下さうとする習慣がありますけれども、既に先に述べました樣に、唯さへ生れてから暫くの間は兒の体重が減じるものでありますのに下劑などを與へますと益々衰弱を加へるばかりであります。分娩後に漏す處の胎糞は姙娠中胎兒の腸内に溜つて居た垢とも見るべきもので、決して民間に傳へて居る樣な胎毒ではありませぬ。自然に兩三日經つ間には悉く排出するものであります。然し分娩後兩三日の間は母の乳汁の分泌が不充分でありますから牛乳を以て其不足を補はなければなりませぬ。其牛乳の稀め方は後に述べます人工榮養法の條下を參照せらるゝ樣に希望致します。五香湯などを與へて兒を衰弱させる人は兒を可愛がり殺すと云ふものです。

三、母乳を禁ずべき場合

前にも述べました樣に母の病毒は乳の中に移行し兒の体内に入つて害を致しますから黴毒、結核、癩病、脚氣、肺炎、腸窒扶斯、痘瘡其他の傳染病を患ふるもの、精神に異狀のあるもの、癲癇、强度の「ヒステリー」、体質の虛弱なもの、ひどく貧血して居るもの、下痢發熱等あるものは乳を與へる事を止め、善良な乳母を撰び兒を養育させなければなりませぬ。然し此の際授乳を廢するには必らず先づ醫師の診察を受け其指揮に從はなければなりませぬ。さうでなくして輕々しく授乳を廢しますと間もなく乳の出が止み再び之を與へ樣と致しましても容易に其分泌を增すものではありませぬ。

四、授乳上の注意

兒に乳を與へますには常に兒に一定の習慣をつけてやる事が肝要であります。兒が泣くからと云つて其度毎に乳頭を哺ませ或は乳頭を哺ませながら睡眠させる樣な事は最も忌むべき事でありまして、其の爲め兒の睡眠中に乳頭で鼻孔を壓し窒息させ取り返しのつかぬ事になる怖れがあります。元來兒が啼くと云ふ事は必ずしもお腹がすいたからではなく、大小便の爲に襁褓の濕れた時或は身体に異和を感じる時など種々の場合でありますから、若し兒が泣く度毎に乳を與へますと乳汁は未だ發育の充分でない胃に充ちて遂に吐く樣になり後には胃腸を害するものであります。故に晝間は二時間から三時間目位に、夜間は四時間から五時間毎位に凡そ二十分間位宛乳嘴を哺ませる樣にするのがよろしく、殊に睡眠中は胃腸の働きが殆ど休止の狀態にありますから、睡眠前に攝りました乳汁は睡眠中胃腸内に滯り消化不良を起し易いので、乳を與へながら眠らせると云ふ事はよくない事であります。そして授乳の前後には乳頭(乳嘴)や兒の口内を清水に浸した軟かな清潔な綿紗か綿花で能く拭ひ清潔にしなければなりませぬ。乳嘴や口内の不潔は兒の口内の病を起させ又母の乳房の炎症を起す恐れがあります。今試みに授乳時間を表で示して見ますならば

生後一週間	毎二時間授乳	一日八回
生後一ヶ月	毎三時間授乳	一日七回
第二ヶ月中	毎三時間授乳	一日六回

例へは　午前六時、九時半、午後一時、四時半、八時、十一時

第四ヶ月以後	毎四時間授乳	一日五回

例へば　午前三時、十時、午後二時、六時、十時

五、離乳

兒が生れまして七八ヶ月を經過し二三の乳齒が發生致しましたならば乳の傍ら粥汁、半熟卵、スープ等に少量の食塩と砂糖とを加へたものを一日二三回宛與へて之に慣らし、漸次乳離れの準備をせねばなりませぬ。

離乳は土地、人情の異なるに由つて多少異ひますけれども生後十ヶ月位にするのが適當であります。然し乳離れの時が夏でありますと消化不良を起し易い故寒冷の候を待つて行ふ樣にする方がよろしく、生後十ヶ月位を經過致しますと母の乳の出方は減じ、兒の乳齒は發生し、粥汁、粥等の樣な軟かい食事を攝る事が出來ますから次第に乳を與へる度數を減じ、前に申しました食餌を與へ一二ヶ月の間に自然と全く乳を離せばよいのであります。決して急速に乳を離してはなりませぬ。又授乳期中でありましても母親が病氣になるとか或は再び姙娠した場合には醫師の指揮に從ひまして乳を離さなければなりませぬ。

六、其他の育兒上の注意

母乳又は乳母の乳汁が兒に適當であるならば兒は日を追ふて發育し、よく肥つて体重も增すものでありますから、一週一回宛兒の体重を秤つて見るが宜しくあります。其に由つて發育の狀態を檢する事が出來

ます。而して兒の便通は常に注意せねばならぬものでありまして、天然榮養にありましては多少下痢、人工榮養にありましては秘結の傾があるものでありますから、常に其度數、色、分量、臭氣に注意し、若し黄色が變じて綠色となるとか、沫が混じつて居るとか、一晝夜五六回以上も下痢するとか、或は便の中に白或は黄色の凝固物を混じて居るとか、便通が秘結し兒の腹部が緊り便通の時泣くとか、發熱を伴ふとか便に惡臭を放つ等の事がありますならば、既に胃腸を害して居る徵候でありますから速に醫師の診療を乞はなければなりませぬ。

又嬰兒（あかんぼ）の胃は發育が不充分でありますから一度に澤山の乳を與へますと吐逆します、又胃腸の障害の爲めに吐く事もありますから、若し乳を吐く事が頻々として起る樣であれば醫師の診察を受けなければなりませぬ。

小兒の皮膚は誠に薄弱なものでありますから、常に清潔に保たなければ皮膚病に罹り易いのであります。故に毎日入浴させ、襁褓は注意して屢々乾かして温めたものと取り替へ、濕潤しない樣に注意し、且つ生後二三週間經つたならば天氣のよい日に一二時間宛戸外に伴ひ新鮮な空氣に觸れさせると云ふ事が誠によい事であります。然し此時ひどく身体を振動せしめる事は慎まねばなりませぬ。三四ヶ月後になりますればば動搖の少ない子守車（乳母車）に乘せる位の事は差支へありませぬが、搖籠に乘せ或は兒の泣くのを鎭める爲め身体をひどくゆすぶる事は宜しくありませぬ。能く兒て居ると中には子供の[illegible]ちぎれはせぬかと思ふ程振つて居る人が在る樣ですが子供もたまつた者ではありませぬ。

身体の弱い殊にお產後少た時日を經ない嬰兒を脊負ふ事は、兒の胸部や腹部を壓迫して發育を妨げ、時としましては背部に頭を垂れて眠り之れが爲に鼻孔を壓して窒息する事があります。殊に百日以内の小兒は自分で頭を支へる事が出來ませぬ故負ふたまゝ眠らせると云ふ事は誠に危險であります。若し强いて脊負たいとおもふならば兒の背と子守の背とが向ひ合ふ樣に所謂觀音負ひにする方がよろしくあります。

又無意識であつて五官器の發達しない兒を愛撫するのあまり高い聲で呼び、或は兒を寢せつける爲に聲高く子守歌を唄ひ、或は身体をひどくゆすぶる人なども有りますが誠によくない事でありまして、之が爲めに腦神經を刺戟し睡眠は却つて不安となり夜泣きする等の事があります。

可愛さの餘り兒を接吻するものもありますが、之が爲に黴毒、結核等の病を傳染させる恐がありますから注意しなければなりませぬ。兒は頸部の筋肉が未だ充分發達せず自ら首を支へる事が出來ませぬから、生後三ヶ月位は小さな寢臺に横たはらせるか或は抱く樣にし、決して起座させてはなりませぬ。大小便は常に乾いた襁褓を以て之を受け、六ヶ月後になりますれば抱へてさせても差支へなくなります。兒は生れて間もなく大小便を漏らすものでありますが、若し一日中に排泄しない時には醫師の診察を受けなければなりませぬ。

兒の衣類は何時も寛やかで窮屈でない樣に仕立て、紐は常に緩くし前で結ぶ樣にしなければなりませぬ。窮屈な卷蒲團は兒の發育を害しますから用ひない方が宜しく、子供を抱たりする時分には毛布でもかけて樣に、總て小兒は大人よりも冷へ易いものでありますから常に暖に保たなければなりませぬが、餘り厚す

の癖をつけない樣に注意しないと却つて身体皮膚の抵抗を弱くし、感冒に罹り易くなる恐れがあります又入浴後直ちに外出させ、或は朝早く或は夜間などに屋外に連出す事は感冒のもとになりますから餘程注意しなければなりませぬ。

未だ頭蓋骨の柔軟な、殊に腦の發育してない嬰兒の頭髮を剃る事は腦を刺戟し感冒に罹らせ易い恐れがありますから之を止め、頭髮が長く伸びた時は鋏で短かく苅り取る樣にし、頭には輕い風通しのよい毛糸の頭巾か帽子を被らせて置くが宜しくあります。

第三　未熟兒の看護法

未熟兒は早產兒とも申しまして、姙娠八ヶ月から十ヶ月までに分娩したものを云ひます。發育が不完全な爲めに餘程注意して看護しなければ成育し難いものであります。未熟兒に就て最も注意しなければならない事は体温を失はぬ樣に温かにする事であります。即ち兒の蒲團は輕く暖かにして常に冷却しない樣に湯婆を入れるか、或は哺育器と云ふ箱に入れ、兒の寢室に隙間風の侵入を防ぎ暖室法を講じなければなりませぬ。

未熟兒に哺乳量が成熟兒よりも少ないものでありますから、少量宛度々即ち一時間乃至二時間毎に與へ若し乳嘴を咬む事が出來ない場合は搾つた乳を匙で少量づゝ與へるか、或は綿紗に綿を入れ柔かい小さな乳豆を作り、盃等に乳を盛り作つた乳豆をさし込んで乳を與へる樣にするが宜しく、未熟兒は呼吸する力が弱いものでありまして、殊に睡眠中には俄かに呼吸を止めて死ぬるやうな事がありますから常に其呼吸の狀態に注意し、若し顏貌に變化を來し口唇が紫色に變ずるとか云ふ樣な場合には直ちに人工呼吸法を行ひ、若し呼吸が不正となるか或は餘り久しく睡眠する樣な事があれば時々之を刺戟して眼を醒させ、且つ泣かせる方が宜しいのであります。兒が啼泣するのは恰も体操と深呼吸とを併せ行ふ事になつて肺の膨脹力を增し血液の循環をよくするものであります。又常に血液の循環を良くし皮膚を强厚にし、且つ清潔に保たせる爲に一日一二回宛沐浴をさせるがよろしい。此の沐浴の際は普通の嬰兒に於けるよりも湯の温度を少しく高くする事が必要であります。

而して一般に未熟兒は腋窩、股間等が糜爛し易く、容易に胃腸を害し或は口内に病を生じ易いものでありますから常に注意を怠つてはなりませぬ。

第四　乳母の撰擇並に乳母の攝生法

母の乳汁の分泌が少ないか或は病其他の原因により其小兒に乳を與へる事が出來ませぬ時には、適當の乳母を撰んで之を養育させなければなりませぬ。此の乳母の撰擇は醫師でなければ出來難いことでありまして、外見上健康に見える婦人でも潛伏して居る病があるかも知れないのであります。然し豫め其撰擇法を心得て置きまして、此婦人ならばと思ふものを醫師に賴み檢査を受ける樣にしたならば大變便利であります。

今其要點を擧げて見ますれば、乳母は二十歳から三十歳位迄の間で体格、榮養共に申分なく、黴毒、淋病、結核、癲病、「トラホーム」、其他の傳染病がなく、癲癇、精神病、脚氣、慢性皮膚病等なく、性質温順であつて行儀正しく、怜悧であつて既に一二回分娩を濟ませ、其産んた小兒は其婦人の乳にて良く成育して居り、乳房は能く緊滿して鐘狀をなし、乳嘴(乳頭)は突出し之を搾ると乳汁は線をなして噴出し、其乳汁の一滴を爪の上に滴下して見ると滴狀をなすものが良いのであります。而して乳母の分娩期は生母の分娩時より二三週早くて未だ分娩後月經の來潮しないものがよいのであります。

乳母は生母に代つて其小兒を養育するものでありますから、産褥中に於ける生母の攝生法と同樣に常に消化し易い食物を攝らせ、新鮮な空氣中に適當な運動をさせ、便通を整へ、且つ襁褓の洗濯等慣れた業務を取らせなければなりませぬ。

第五　兒の人工榮養法

母親が病氣であるとか他に事情があつて自から生兒に乳を哺ませる事の出來ない場合に、乳母を雇ふ事も出來ない時は止むを得ず人工榮養法によらなければなりませぬ。母乳の代用品で最も小兒に適當なのは驢馬又は山羊の乳であります。けれども是等は容易に得難いものでありますから通常牛乳を用ひます。牛乳は人乳に比べまするこ固形分に富み消化し難いものでありますから、兒の年齢に應じて適度に稀め、且つ糖分が少い故乳糖又は適度の砂糖を加へ、且つ病氣豫防の爲に煑沸消毒を行ひ、時を定めて一定量宛與へなければなりませぬ。牛乳屋から配達して參ります殺菌乳は既に消毒濟のものでありますから、甚熱い間に冷藏庫又は井戸水の中へ入れ冷して置いて、小兒に與へる前に適度に稀釋し之を暖めて糖分を加へるがよろしい。又人間の食料には「ヴヰタミン」になるものが必要であります。此ものは牛乳の中にも混じつて居りますけれども百度以上に熱するこ其作用が少なくなりますから、消毒した牛乳の中に「オロシ大根」の汁か野菜の汁を少し混ぜる方が理想的であります。牛乳を度々煑沸する事は面白くない事であります。若し自宅にて牛乳を消毒し度いこ思はるゝならば牛乳屋に命じて消毒のしてない牛乳を配達させ、ソックスレツト氏の牛乳消毒器こ云ふ器械で十五分乃至二十分間消毒して冷所に貯へて置けばよろしくあります其器械の使用法に就いては醫師又は産婆に直接お尋ねになればよく判ります。

牛乳を稀釋致しますには兒の出産後の月日に應じて加減しなければなりませぬ故其大要を擧げませう。

生後十日以内	牛乳一分	湯三分
十日後一ケ月前後	牛乳一分	湯二分
二ケ月後三ケ月前後	牛乳一分	湯一分
四ケ月後六ケ月マデ	牛乳二分	湯一分
七ケ月以後	全乳	

殊に牛乳を稀釋するに十分の一の水飴を加へた粥汁(重湯)を用ゆるか、或は粥汁に滋養糖を加へたものを用ふれば大變兒が太ります。粥汁は白米五勺に水五乃至六合を加へ三十分間煑沸して上澄三合を採つた

ものが適當であります。而して牛乳は其一回量宛を乳瓶に分けて置いて、暖めて與へ、決して飲み殘りの乳を保存して置き再び與へる樣な事をしてはなりませぬ。

人工榮養の場合でも母の乳を與へるこ同樣に生後一週間は二時間毎に、一ヶ月から二ヶ月の間は三時間毎に、四ヶ月以後は四時間毎に與へる樣にする。一回に與ふる乳の分量は兒の發育の程度こ榮養の良否に由り著しい差異のあるものでありますけれごも今其大要を左に擧げて見ますれば

年齢	一回量	一日總量
第一日	一〇、〇グラム	八〇、〇グラム（約四勺）
第二日	二〇、〇グラム	一六〇、〇グラム（約八勺）
第三日	三〇、〇グラム	二四〇、〇グラム（約一合二勺）
第四日	四〇、〇グラム	三二〇、〇グラム（約一合六勺）
第五日	五〇、〇グラム	四〇〇、〇グラム（約二合）
第六日	六〇、〇グラム	四八〇、〇グラム（約二合四勺）
第七日	七〇、〇グラム	五六〇、〇グラム（約二合八勺）
第二週乃至一ヶ月	一〇〇、〇乃至一五〇、〇グラム	六〇〇、〇乃至八〇〇、〇グラム（約三合乃至四合）
第二ヶ月乃至第三ヶ月	一六〇、〇乃至二七〇、〇グラム	八〇〇、〇乃至九〇〇、〇グラム（約四合乃至四合五勺）
第四ヶ月乃至第六ヶ月	一八〇、〇乃至二〇〇、〇グラム	九〇〇、〇乃至一〇〇〇、〇グラム（約四合五勺乃至五合）

第七ヶ月以後一　二〇〇、〇グラム一一〇〇〇、〇乃至二五〇〇、〇グラム（約五合乃至七合五勺）

牛乳を得難い場合又は船にて旅行する時などには止むを得ず、「コンデンスミルク」（煉乳）を用ひます。「コンデンスミルク」は甚だ濃厚でありますから牛乳よりも更に稀釋しなければなりませぬ。然し此の「コンデンスミルク」は多量の糖分を含んで居りますから特に糖分を加へる必要はありませぬ。今其稀釋法を御覽に入れますこ

一週間以內	コンデンスミルク	一分	湯　二十五分
二週乃至二ヶ月	同	一分	同　二十分
三ヶ月乃至六ヶ月	同	一分	同　十五分
六ヶ月以後	同	一分	同　十分

「コンデンスミルク」は消化器の中で醗酵し易く、從つて腸や胃を害ね易いものでありますから成るべくならば牛乳を用ひ、萬止むを得ない時にのみ「コンデンスミルク」を用ふる樣にし度いものであります。

又牛乳に代るべき「ミルクフード」、「ラクトーゲン」、乳粉、小兒粉等種々の榮養品がありますけれごも牛乳に勝るものはありませぬ。でありますから之等を用ひ樣こ思ふならば其都度醫師に賴み兒の診察を受け且つ品質の撰擇を乞はねばなりませぬ。さうでないこ却つて榮養障害を來す恐れがあります。何故かこ申しますこ、坊間に販賣して居ります牛乳の製品にも各々特徴がありますから、兒の年齢・体格の强弱、消化器の模樣等に應じて適當なものを撰ばなければなりませぬ。其他人工榮養を致します上に於てよく注

意しなければならぬ事は乳瓶、硝子管、護謨管等を清潔にすると云ふ事でありまして、授乳後には熱湯を浣ぎ充分洗滌する樣に力めなければなりませぬ。

兒が生れて七八ヶ月を經過し乳齒が發生を始めましたならば乳の傍ら粥汁、粥、半熟卵、スープ等を與へて之に慣れさせ、乳を離す時の準備をしなければなりませぬ。又間食として小兒に與ふべきは乳、ボーロ類、葛湯、輕い煎餅類、カステーラ等でありまして、餡物(饅頭、最中、金時等の如き)、ジャム、蜜柑柿、桃其他の果物、昆布、鰯、天ブラ、氷水、サイダー等はよくありませぬ。

人工榮養で兒を育て樣とする事は頗る困難でありまして、榮養不良、腸胃病等に由つて死亡せしむる事が多くあります。生兒一千人中一年只内に死亡するものゝ多い事は先にも述べた通りでありますが、伊太利の調査に從ひますると死兒二千人中五割一分は腸胃病にて斃れて居ります、日本ではそれ以上でありまして一千人の兒童中毎月死ぬるものゝ内人工榮養によるものが九十二人二分四厘、牛乳と人乳の混合によるもの四十人九分八厘、牛乳によるもの三十八人七分四厘、乳母の乳によるもの六人三分二厘、生母の乳によるもの六人二分五厘と云ふ統計を示して居るのであります。是に由て如何に人工榮養が面白くないかを知る事が出來るのであります。人工榮養で兒を育てるのをハイカラの樣に思ふて居る御婦人あらば飛だ間違つた話であります。

第十六章　兒の疾病

第一　臍の疾病

兒が生れて七八日たちますと、臍帶(へそのを)の殘部は自然に乾燥脱落するものでありますが、之を不潔に致しますと臍帶の斷端から黴菌が侵入して丹毒、破傷風等思がけない危險の病に陷る事があります。それ故臍帶が落ちましてから後も其創面が全く治癒する迄決して不潔にならぬ樣に心懸け、醫師に適當の藥を乞ひ受けて之を撒布しなければなりませぬ。又此樣な危險な病に罹る樣な事がありませんでも膿爛(たゞれ)、腫脹(はれ)等を起し或は出血する等の虞があります。生來臍の輪の大きなものは、咳嗽(せき)をしたり啼泣(なき)いたり或は噴嚏(くしゃみ)、努責(いきみ)等した時に其臍輪の間から皮下に腸管や腹膜等が脱出して俗に云ふ出臍となる事があります。之を臍脱腸と申します。此ものは假令脱出しましても直ぐに還納する間は危險はないのでありますが、若し脱出して整復する事が出來ない樣になると腸嵌頓と稱する誠に危險な症狀を呈する樣になります。それ故臍脱腸のあるものは綿花を丸めて壓抵し、緊く繃帶を施して其脱出を止めて置かなければなりませぬ。南瓜は臍の大きいのは甘いですが人間は不幸です。

第二　眼の疾病

母が若し姙娠中に淋疾に罹り白帶下が多いと分娩の際其病毒が兒の眼内に移行し、初生兒膿漏眼即ち俗に云ふ風眼を起し遂には失明するものが多いのであります、又淋毒性の白帶下で汚れた手指などが兒の眼

に觸れても同樣であります。故に姙娠中多量の白帶下がある時には、假令淋毒に感染の疑がなくても豫め醫師の治療を受けて置く必要があるばかりでなく、分娩の時は受持の產婆に告げ膣をよく淨潔して貰ひ且つ生れた兒の眼には豫防的に眼藥をさして貰はなければなりませぬ。

本病は出產後二三日の後に起り、一眼或は兩眼の眼瞼が腫れて赤くなり、兒は痛みの爲めに泣き、眼の中からは初め多量の水樣液を分泌し、次で此分泌物は膿の樣に變じ、上下の眼瞼は粘着して容易に眼を開ける事が出來ない樣になります。强て眼を開けて見ますと眼の中は朱を流した樣に赤くなり、時としては既に眼球に疊りを生じ、速に專門醫の治療を受けなければ遂に失明して盲目となるのであります。若し此分泌物を他の健康な眼に附着すれば忽ち傳染しますから、此病人の看護に從事するものは常に注意を拂はなければなりませぬ。若し一眼だけ病に罹りましたならば他眼に傳染させない樣に心懸け、分泌物の附着した手指は嚴重に消毒し、病眼を拭つた綿花、綿紗等は嚴重に消毒するか或は燒却しなければなりませぬ。本病は獨り分娩時の膣內の分泌物に由つて感染するばかりでなく、大人小兒の別なく淋毒性の分泌物に由つて起るものでありますから、平素淋疾の疑ひあるものは決して注意を怠つてはなりませぬ。世間では小兒が風眼にかゝると直樣產婆の不注意の樣に申しますけれども、御產の時に兒の顏が膣內にある時間は僅かなもので、實際は生れて後ちに不潔な手指、手拭などから病毒が眼に入ることが多いのであります。

第三　兒の發熱

兒が生れて兩三日たちますと、風を引いたでもなく腦が惡いでもなく唯わけもなく熱の出る事があります。其の爲めに別に鼻がつまるとか咳嗽がでるとか噴嚏をするとか云ふ事もなく、唯だ熱が三十八度から三十九度位に上り、兒は如何にも身體が倦る想に見ゆ、泣て機嫌が惡くなります。此熱は兩三日も續く事もありますが多くは半日か一日の後に下ります。丁度此熱の出るのが兒の體重の下る時にでるし、又體重の減りかたの多い兒が餘計に熱を出す處から飢餓熱と名がつけられて居ります。殊に兒を暖め過ぎた時によく發熱するもので、夏など厚着させたり部屋を閉め切て置たりすると熱發いたしますから暖め過ぎない樣に、又榮養を與へる事の少くない樣に充分榮養を取らせる必要があります。

此れが飢餓熱であるか他の病の爲めに熱發したものか醫師でなければ診斷が出來ませぬから、兒が熱發したと思ふ時には早く醫師に診て貰ふ事が必要であります。殊に新生兒は熱に堪へ難いもので、一寸した熱でも痙攣を起したり何かするものですから注意しなければなりませぬ。

其他兒は感冒や肺炎、氣管支炎、腦膜炎など種々の病の爲めに容易に熱を出すものでありますから、油斷をして居ると取り返しのつかぬ不幸を見る事があります。尙ほ一言御注意申して置きたいのは熱がある時には頭痛がするものですから、頭を氷ででも冷やすと云ふて頭を冷やす事であります。誰でも熱がある時には頭痛がするものですから、頭を氷ででも冷やすと誠に氣持が宜しいものですが、之を其まゝ生れだちの子供に應用し頭を氷などで冷やしますと直ぐに冷ゑ切て仕舞ひ、却つて害を及ぼす事があるもので、濕れた手巾か冷水で絞つた綿紗位で冷やす方が却つて宜しい場合が多くありますから、冷やすと云ふ事でも豫め其みちの醫師に相談して其意見に從ふ樣に

しなければなりませぬ。

其れから嬰兒は鼻から計り呼吸する事を覺ゐて口から呼吸する事を知りませぬから、少し風でも引いて鼻がつまると呼吸が出來ず乳を呑む事が出來なくなりますから風を引かさぬ樣に注意し、鼻がつまり出したら能く注意して屢々鼻汁を拭いてやらねばなりませぬ。

第四　口内の疾病

嬰兒の口内を不潔にしますと屢々鵞口瘡菌と申します黴菌が侵入繁殖しまして、鵞口瘡俗に「シタシトキ」又は「シタシタ」と稱する病を惹き起し、口唇の内面、舌の表面、口蓋、咽頭等の粘膜に始め白い斑點を生じ、恰も乳の滓が附着した樣に見ゐ、强いて之を拭ひ去らうと致しますと後に出血します。次で此白班は口内粘膜全般に蔓延し、兒は痛みの爲に哺乳する事が出來ず啼泣し、時としましては發熱する事もありまして、兒は次第に衰弱致します。

本症は豫防法が第一でありまして、常に口中を清潔に保ち、乳を與へる前後には清水又は硼酸水を綿花に浸して口内を清拭しなければなりませぬ。殊に未熟兒、生來虛弱な嬰兒は一層本症に罹り易いものでありますから注意を要します。若し本症に罹つた樣な事があらば速に醫者の治療を乞はねばなりませぬ。

第五　耳の疾病

兒の沐浴に際し注意しなければならぬ事は耳の中に湯を入れぬ樣にする事であります。若し耳の中に湯が侵入しますとよく外聽道炎、中耳炎其他の炎症を發し、發熱疼痛の爲め兒は睡眠する事が出來ず、啼泣して乳を飲まず、甚だしいのになりますと腦膜炎を起して痙攣を發し遂に死に陷るものであります。此の炎症は必ずしも浴湯の侵入によるだけでなく、感冒其他の原因に由つて起る事もありますゆゑ、兒が譯もなく泣いて不機嫌となり、何の爲めか乳らず一兩日を經過する間に突然耳の中から黃色を帶びた水樣液が漏出し、始めて耳の病であつた事に氣附く樣な事もあります。

此の樣な場合には耳の孔若しくは其下の方を壓して見ますと、果して耳に病がありますならば必ず兒は其壓迫に際し泣くものでありますから略ほ想像する事が出來ます。若し耳に病があると云ふ事が判れば直に醫師の診察を受けねばなりませぬ。醫師が來るまでは先づ耳の外から冷水又は五十倍の硼酸水で冷濕布を施す位の事にして置くがよろしくあります。

第六　初生兒黃疸

生後四五日經過しますと多くの新生兒の中には全身の皮膚が黃(きいろ)くなり、時としては眼の中に至るまで黃味(きみ)を帶び、哺乳が減じて不機嫌となり衰弱するものがあります。之は黃疸と云ふ病であります。然しこれが爲めに兒が死ぬと云ふ樣な事はなく、多くは一二週も經ちます間に自然に治癒するものでありますが、其間は兒の便通に注意し、充分乳を與へて衰弱させない樣に心懸ける事が肝要でありまず。萬一衰弱が甚

だしい時には醫師に診てもらひ、充分なる養生をさせなければなりませぬ。

第七　胃腸の疾患（消化不良）

新生兒並に乳兒の病の中で最も注意すべき事は胃腸即ち消化器の疾病でありまして、乳を與へるのが不規則だとか、乳の分量が不定だとか、或は人工榮養にありましては牛乳の性質が惡いとか、其稀釋法が不適當であるとか、消毒が不完全だとか、乳の保存法が惡いとか、腐敗に傾いた乳を與へるとか、腹部を冷やすとか、まだ齒も生じぬ内から乳以外の種々な間食を與へるとか、哺乳の器が不潔であるとか云ふ樣な種々雜多な原因に由りまして胃腸を害し、消化不良と云ふ容態を起すものであります。

此病に罹りますと兒は屢々乳を吐き、噯氣を催し、顏面は蒼白くなり、お腹は緊滿し、大便は秘詰して一日も二日も便通がない事もあり、或は反對に一晝夜に五回も六回も下痢し、其便は臭氣が甚だしく、其色は綠色となり、泡沫を混じ或は白色に變じ、且つ便の中に白色又は黃色の凝固物を混じ、兒は便通の前に腹が痛むので泣き不機嫌となり、次第に衰弱して痩せ、皮膚は皺が出來、頭に比べて顏面が小さく且つ長顏となり、一寸見ると老人の樣な相になり、大顖門は弛緩して凹くなり、泣く聲さへも低くなり、遂に乳も飲まなくなつて死ぬるのであります。それ故少しでも便の色が惡いとか臭氣が變だとか、下痢するとか乳を吐くとか、大便が秘詰するとか衰弱するとか、何か異狀を認めましたならば速かに醫師の診察を受けて其指揮に從ひ適當の養生を怠らぬ樣心懸けなければなりませぬ。

第八　乳兒脚氣

脚氣に罹つて居る母又は乳母の乳を飲んだ爲に起る病氣でありまして、生後一ヶ月から一年以内の兒を冒す事が多いのであります。始め兒は何となく元氣を失ひ、乳を與へますと吐き、腹部は張り、大便は秘結しますか或は下痢して綠色の便を漏らし、口唇の周圍は蒼白くなり、足背に浮腫が來、後には聲が嗄れ遂には衰弱して死にますか或は大人の脚氣衝心の樣に突然脈搏が惡くなり、呼吸は促迫し、口唇、指先等が紫藍色に變じ屢々痙攣を發して死ぬる事もあります。

今述べました樣に乳兒脚氣は誠に心配な病氣でありますから、母又は乳母の下肢に浮きが來るとか、知覺が鈍痲して痺れを感じるとか、兩下肢に著しい倦怠を覺ゆるとか、聊でも脚氣らしい症狀がありますれば直ちに醫師の診察を受けて、乳を止めるか混合榮養とするか醫師の指揮に從ひ適當の處置を取らなければなりませぬ。若し又兒の元氣が何となく衰へ、乳を吐くとか綠色便を漏す樣な事があれば假令母或は乳母に脚氣の症狀がありませぬでも醫師の診察を乞はなければなりませぬ。何故かと申しますると、母や乳母は自分では健康だと思つて居ましても知らぬ間に脚氣に罹つて居る樣な事があるからであります。

第九　腦膜炎

大人の腦膜炎と同じ樣に、中耳炎があるとか結核があるとか或は其他の原因で嬰兒が腦膜炎に罹り、急

に死亡するか或は幸に治つても、腦水腫と申して馬鹿に頭の大きな人間になつたり、馬鹿になつたり、或は半身がきかなくなつて手足の運動が出來ない人間になつたりする事も隨分澤山ありますが、其れでなくて嬰兒が突然乳を吐いたり夜泣きをしたり不機嫌になつたりして俄かに痙攣を起し、脉や顏色が惡くなり急に死亡するものが澤山あります。其症狀が全く腦膜炎と同樣でありますから腦膜炎、腦膜炎と申して居りますけれども、普通の腦膜炎ならば高い熱が出なければならぬのに此分は高い熱が出ない、而して生後六ヶ月以内の嬰兒に多く二つにも三つにもなつてからは患ふものが少ないと云ふ處から、普通の腦膜炎とは異なつた原因から來るのであらうと段々學者が研究されて居ります。

最近になつて、京都大學の小兒科の先生は是は白粉の中毒だと云はれて居ります。母が餘り白粉をつけるから其の中の鉛の爲めに中毒を起すのである、其白粉は母の手や乳の尖や或は母の衣服の襟についたりして居るのが知らず〳〵の内に兒の口内に入るのであつて、現に此病氣にかゝつた兒の便の中に鉛が出て居る想であります。殊に六ヶ月以内の嬰兒は身体が薄弱だから僅かの白粉でも中毒する、其れが一年以上もたてば、常に母の膝に居ると云ふ譯でもなく、乳ものまぬ樣になるし身体も强くなるから、中毒にかゝる事が少なくなるのだと云ふ事であります。其外汗疹や糜爛が出來ると能く白粉をつけてやる人がありますが、是も中毒を起す原因の一つだ想であります。何と恐ろしい事ではありませぬか。白粉ばかりつけて綺麗にして居る奥さんも困つた者です。兒を育てる人は白粉一つつけるにも餘程注意せられぬと可愛い兒を殺しますよ。

近來白粉に無鉛白粉と云ふて賣つて居るのがありますが、實際鉛なしでは具合のよい白粉は出來にくゝ無鉛の白粉と云ふものは誠に少ないものだ想ですから、同じつけるにも鉛の絶對に入つて居らぬ白粉を選ぶ事が必要であります。

第十　遺傳黴毒

既に流産並に早産の處で述べました樣に、男女何れか一方に黴毒があるものゝ兒は姙娠中に流産又は早産をする事が多いのでありますが、幸にして成熟して出産しましても全身に遺傳黴毒、俗に云ふ胎毒の症狀を具へて全身浮腫狀を呈し、皮膚は汚なく皺が多く、殊に口唇の周圍、手掌、足蹠等は銅色を帶び、所々に斑點があり、或は手の掌、足の蹠、腋窩、頸部、鼠蹊部等に水胞を生じ、表皮は剝脱し易く、鼻や耳の病に罹り易く、生來虛弱でありまして死亡し易いのであります。それ故姙娠中に黴毒の疑があるものは醫師の診察を受けて豫め治療を施し、出産後兒に前に申しました樣な症狀がありますならば速に醫師の治療を乞はなければなりませぬ。頭や顏のカサだらけの子供を能く見ますが、多く此遺傳黴毒でありまして親の因果が兒に報ふたとでも申しませうか。

第十一　種痘

兒が生れて五六ヶ月を經過致しましたならば痘瘡豫防の爲め種痘を施さなければなりませぬ。種痘は法

律を以て勵行せらるゝ處のものでありまして、官廳の指定する種痘所に兒を伴ひますか或は醫師に托して行はなければなりませぬ。然し發熱があるこか衰弱して居るこか、發育が不良であるこか、兒の身体に異狀がありますならば豫め醫師の診察を受け然る後種痘の適否を決定しなければなりませぬ。

種痘を致します前には先づ兒を入浴させて清潔な衣物を纏はせ、種痘後は成るべく寛やかな衣服に更へ入浴を禁じ毎日温湯で身体を拭ふだけにするがよろしく、飲食物は特別に改める必要はありませぬ。且つ種痘後異常がありませぬならば屋外に出すも差支へはありませぬ。

接種致しました後は四日位で其部に小さな水胞が出來、此の際少しく發熱し不安こなるのが常であります。次で此の水胞は日を追ふて增大し豌豆大に達し、九日から十日目になりますこ膿胞に變じ、其周圍は少しく赤くなり、接種後十二三日を經過しますこ膿胞は乾燥して痂皮を造り、約三週間で痂皮は脫落し治癒するものであります。故に接種後は其部を摩擦又は搔爬せぬ樣に注意し、水胞の周圍が甚だしく赤くなりました時はワゼリン等を塗り繃帶を施すがよろしう御座います。

第十二　實布的里亞

實布的里亞は主こして小兒を襲ふ處の法定傳染病でありまして、傳染後二乃至五日の間に發熱し、咽頭に痛を訴へ嚥下が困難こなり、咳嗽を發し、次で咽頭、口蓋の粘膜等に灰白色の斑點又は義膜を生じ、同時に咽頭が赤くなつて腫れ、聲は嗄れ呼吸困難を起して死ぬるものが多くあります。故に兒を本病の患者に近けない樣に注意し、萬一疑はしい症狀を發しましたならば直に醫師の治療を乞ひ、同時に健康者こ隔離し、醫師の指揮に從ひ遺漏のない處置を施さなければなりませぬ。

第十三　麻疹

麻疹は主に小兒を襲ふ處の傳染病でありまして、病毒は患者の血液、涙液、咯痰、皮膚發疹の內容物等の中にあり、接觸に由つて傳染するものであります。之が傳染するこ一週間から十日間位は潛伏して居りますが、次で寒氣を催ふし、時こしては戰慄を發し、三十九度乃至四十度に發熱し、眼の結膜は紅くなり涙を流し、羞明を感じ、鼻がつまりて噴嚏を發し、鼻汁を垂らします。多くは感染して二週間後に再び發熱し、全身の皮膚に汗疹の樣な隆起のある赤色の小疹が出來ます。此小疹は鮮紅色又は暗赤色でありまして各疹の間に健康な皮膚が介在し、殊に顏面に最も多く發疹致します。次で咽頭が痛み物を嚥み込むのが困難こなり、時々咳が出て聲が嗄れます。此の發疹は四五日經ちますこ大抵次第に消退し、糠の樣な皮がむけて治ります。

本病は殆んご凡ての小兒を冒し、一度本病を經過しますこ免疫性こなり二度こ此の病に罹る事が稀であります。若し本病に罹りましたならば健康なものこ遠ざけ、暖かい廣い室に安臥させ、羞明く感ずるものでありますから室內を暗くし、電燈に覆をなし、咳嗽のあるものには室內に水蒸氣を立たせて空氣を濕潤させ、流動性の食物を與へ、又新鮮な果物の汁等をも與へて醫治を乞はねばなりませぬ。本病は又屢々肺

炎を起し、或は腎臓炎となりまして兒を危險に陷らせる事があるものですから、注意しなければなりませぬ。

以上は日常吾人が遭遇する處の主なるもので、世の婦人として母として心得置べき事は此外にも澤山ありますけれども、餘り多くなれば却つて覺えにくゝなりますから此邊でやめて置く事に致しませう、衛生上の事は如何程聽いても此を實際に應用しなければ何の役にも立ちませぬから、何卒皆樣は是非實行して下さるやうに御願ひ致します。

母と子（終）

大正十三年七月廿三日初版發行
大正十三年十一月五日二版發行
大正十三年十二月三日三版發行
大正十四年五月廿八日四版發行
大正十四年六月廿三日五版發行
大正十四年九月廿三日六版發行
大正十四年十二月五日七版發行
大正十五年一月十六日八版發行
大正十五年一月十日九版發行

（正價金五拾錢）

大阪市北區東梅田町二百九十番地
著作者　土肥衛
大阪市東區高麗橋一丁目二十三番地
發行者　大阪府衛生會
右代表者　高山林平
大阪市東淀川區中津町五十三番地
印刷者　光延義民
大阪市東淀川區中津町五十三番地
印刷所　十光社印刷所　電話北一九一三番

衛生叢書特版

發行所　大阪市東區高麗橋一丁目二十三番地　大阪府衛生會　電話本局一一五番

不許複製

297
191

衛生普及の爲め本會にて飜刻及
發行せし小冊子

醫學博士 永井潛述 榮養と食糧經濟
醫學博士 佐伯炬述 夏と子供
醫學博士 瀨川昌世述 冬と子供
醫學博士 瀨川昌世述 みどりの森
大阪府技師 上村行彰述 子寶に虫をわかすな
醫學士 荻野純三述 衛生簡易講習稿本
各講師共述 國民と結核
醫學博士 北島多一述 齒と健康
醫學博士 島峰徹述 人生と蠅
大阪府技師 大森擎一述

仁丹
二十四博士指導推奬
再度最正なる檢査を經たる絶對優秀品
仁丹の体温計
一本の用意一生の幸福
全國到る處にあり
七大特長
1 經年狂度を防ぎ永久不狂
2 特製硬質硝子を用ひ堅牢
3 反射明瞭
4 示度正確
5 感應鋭敏
6 形狀優美
7 特許留點を應用し振下げ容易
正價一本 參圓

終